

大学教育開発研究シリーズ
NO.21 ● Oct. 2014

アクティブな学びをデザインする vol.4

—学びの転換を促す「導入期」演習科目—

立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

アクティブな学びをデザインする vol.4

—学びの転換を促す「導入期」演習科目—

立 教 大 学

大学教育開発・支援センター

はじめに

本報告書は、当センターが2014年度に開催した、FDワークショップ（授業見学）の成果をまとめた一冊である。当センターが2009年にこの取り組みを始めて以来、多くの教職員にご参加いただき、その都度、このような報告書で共有してきた。

MOOC (Massive Open Online Course) が急速に広がりを見せる中、もはや大学の授業はかつてのようなブラックボックスではなく、世界中に公開するもの、あるいは、すべきものとなった。とはいえ、MOOCでは、双方向型の授業は不可能ではないにしろ難しい。やはりライブの授業には適わないはずである。いや、「ライブの授業には適わない」と認めてもらうために、従来型の大学という「場」でのこれからの教育にとっては、ライブの双方向型授業の質を高めることが喫緊の課題となっている。当センターが授業見学に関する一連の取り組みを開始した2009年当時は、MOOCという巨大な波はまだ意識されていなかったが、ライブでの教育の質を高めるという課題認識は当時から一貫している。教職員がともに学ぶこのような機会を継続的に提供してきたのはそのためである。

特に、昨年度からは、2016年度に予定されているカリキュラム改革の要となる「立教ファーストタームプログラム」の始動に向けて、初年次演習科目の見学に注力している。同プログラムは、学士課程での学修に必要な基本的な姿勢やスキルを「学びの技法」として位置づけ、それを、初年次の全学生に少人数演習科目を通じて提供するというものである。全学部で、それぞれの学問分野に基づいて、この種の演習科目が展開されることになる。共通して求められていることは、教員が「自然と」あるいは「無意識に」身につけてきた「学びの技法」を可視化して、学生に段階的に示し、習得させることであろう。具体的には、レジュメの作成や報告の方法、レポートの書き方、質問や発言の仕方、協同作業の作法などについて、ある程度「型」を示したうえで、学生に実際に体験させ、何かにつまづいているようであれば、教員が学生の傍らまで行って（目線を合わせて）、手を携えて目的地まで導いていく。そこまでする必要があるのかという疑問が生じるかもしれない。しかし、MOOCをはじめとする大学教育を取り巻く環境の変化を考えると、それをしない理由がどんどんなくなっているように感じる。

多くの教職員が過去に受けてきた大学の授業では、このようなきめ細やかな初年次演習科目は存在しなかったかもしれない。しかし、今、われわれにはそのような演習科目の運営が求められている。そこで今回も、初年次演習科目で実施されている積極的な取り組みを見学させていただく機会を設定した。各教員がファシリテーターとなり、学生同士がお互いに学びあうライブの授業を見学し、学生の表情や教員とのやり取りの機微まで十分に観察させていただいた。

授業の質を向上させるための機会や工夫は、他にも多々あるかもしれないが、やはりライブの授業見学は格別であった。本報告書で、ライブ感がどの程度再現されているかは分からないが、教員が学べる、そして、学ばなければならない点が多多くちりばめられていると思う。

最後に、授業見学という貴重な機会を提供して下さった教員と学生みなさんに改めて御礼申し上げたい。

大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部准教授

小澤 康裕

はじめに 小澤 康裕

第1部

学生の学びをどうリードするか

—初年次演習における課題と工夫—

1. ワークショップ概要	8
1) 事前準備 (授業の撮影)	8
2) ワークショップ	9
2. 「基礎ゼミナール1」の概要	10
1) 目標と授業内容等	10
2) 授業スケジュール	11
3. 撮影した授業の紹介	12
1) 構成	12
2) 他己紹介のルール	13
3) グループ報告・討論のルール	14
4. ワークショップでのディスカッション	15
1) 開会挨拶	15
2) 授業の紹介	16
3) 新入学生をどうやってゼミに引き込むか—他己紹介による関係づくり—	17
4) 批判的思考にどう導くか—グループ討論を取り入れた実践—	24
参加者の声 神橋 一彦	34

第2部

批判的思考力を養うグループ討論型授業

—経済学部「基礎ゼミナール1」の取組み—

1. ワークショップ概要	38
1) 授業見学	38
2) 意見交換会	39
2. 見学当日の授業	40
1) 構成	40
2) 討論の過程	42
3. 意見交換会	50
1) グループ討論でなにを獲得させるのか	50
2) 学生にとってのゼミの難しさ	51
3) 課題文献とどう関わらせるか	54

4) 学生の発言とレジュメ	57
5) 学生の変化	58
6) ゼミの人間関係とコミットメント	59
7) グループ作業と成績評価	60
8) 学生と教員の親睦	61
9) グループ発表を聴く側の課題	61
資料 新聞記事課題のフォーマット	
参加者の声 深野 毅	66

第3部

アカデミック・スキルと問題意識を培うコースデザイン ーコミュニティ福祉学部「基礎演習」の取組みー

1. ワークショップ概要	70
1) 授業見学	70
2) 意見交換インタビュー	71
2. 「基礎演習」の概要	72
1) 目標と授業内容等	72
2) 授業スケジュール	73
3. 見学当日の授業	74
1) 構成	74
2) 授業の様子	75
資料 間違いさがし用のレポート	
4. 意見交換インタビュー	84
1) 春学期序盤の授業内容	84
2) 個人→集団→個人で問題意識を深めていく	86
3) グループでのテーマ決定	88
4) 板書によるファシリテーション	89
5) コンピュータ演習	90
6) 見学当日の授業に関連して	91
7) 初年次演習のめあて	95
8) 初年次学生の得意・不得意	97
参加者の声 寺崎 昌男	100

おわりに 幡野 弘樹	102
------------------	-----

第1部

学生の学びをどうリードするか —初年次演習における課題と工夫—

〔 第1部と第2部は経済学部「基礎ゼミナール1」(飯島寛之先生担当)を対象とした
連続ワークショップの記録です。 〕

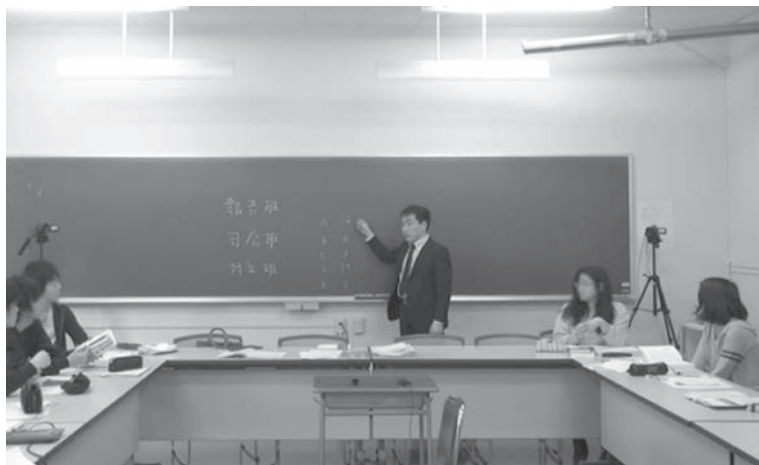
1. ワークショップ概要

1) 事前準備 (授業の撮影)

<授業科目> 基礎ゼミナール1 (経済学部)

<授業担当> 飯島寛之先生 (経済学部 会計ファイナンス学科 准教授)

<撮影日時> 2014年4月17日 (木) 13:15 ~ 14:45 (3限)



2) ワークショップ

<開催日時> 2014年6月3日(火) 12:30～14:00

<出席者数> 17名

<形式> 4月17日(木)に撮影した授業映像のクリップを見ながら、2つのテーマに沿ってディスカッションを行った。参加しやすい時間帯として昼休み中の開始とし、軽食をとりながら開催した。



2. 「基礎ゼミナール1」の概要

1) 目標と授業内容等

経済学部の初年次演習科目として春学期に開講される「基礎ゼミナール1」の概要を以下に示す。

春学期 / 2単位 / 自動登録 (全員履修)
◇授業の目標 大学における学習に円滑に適應できるように、主体的・能動的な学習の態度と方法を身につけることができるようになる。
◇授業の内容 大学の学習は、学生が主体的・能動的に取り組むことで成り立つ。自ら考え、疑問を持ち、課題を設定し、その課題を追究することが学生に求められる態度である。 本科目は、その態度を習得できるように援助することを目的とする。 少人数のゼミナール形式で、具体的な課題を設定し、実践的に学んでいく。文献・論文の読み方、必要な情報を収集・整理する方法、調査の方法、レジュメ及びレポートのまとめ方、プレゼンテーションの仕方、ディスカッション（質疑応答、意見表明）の方法について、実際に課題に取り組みながら習得していく。個人研究とグループ研究を組み合わせる。仲間との協力も求められる。本学の施設（図書館、メディアセンター等）も利用する。 1年次における最重要科目の一つである。全員が必ず履修すること。
◇成績評価方法 出欠(25%)、発表(25%)、議論(25%)、最終レポート(25%) ※4回以上欠席した場合、成績は「不可」になる。

注) 同学部の『講義内容』冊子(2014年度)より抜粋して作成。

2) 授業スケジュール

基礎ゼミナール1（飯島先生クラス）のスケジュールは、以下のとおりである。学期前半（第3回以降）は、グループ報告・討論を集中して行い、後半は、個人で執筆するレポートの経過報告と、それに対する教員のコメント・指導を継続的に行う、という構成になっている。グループ報告・討論によって、学生が個々の関心の幅を広げ、レポート執筆へとつなげていくことが期待されている。

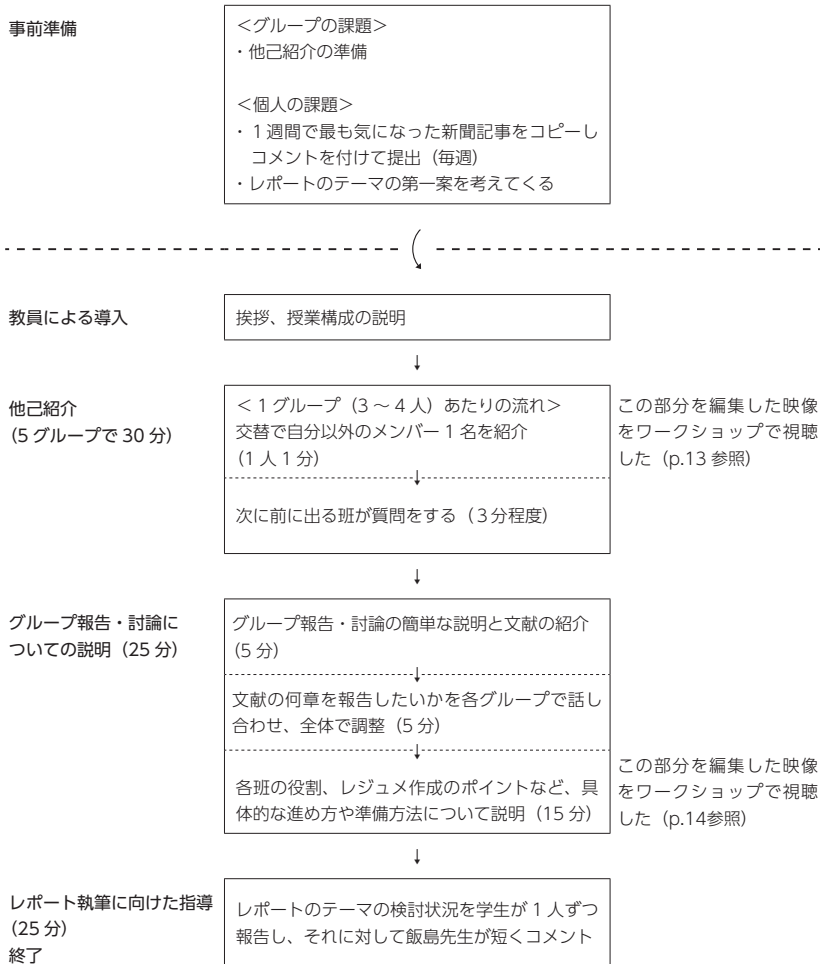
1	4/10	基礎ゼミの内容について
2	4/17	グループ紹介、レジュメについて
3	4/24	グループ報告・討論 ①
4	5/8	// ②
5	5/15	// ③
6	5/22	レポートテーマ・内容報告
7	5/29	グループ報告・討論 ④
8	6/5	// ⑤
9	6/12	レポート一次草稿確認①
10	6/19	// ②
11	6/26	// ③
12	7/3	レポート二次草稿確認①
13	7/10	// ②
14	7/17	// ③

→ 当ワークショップの事前準備として授業の撮影を実施

→ 本書第2部で報告している授業見学を実施

13. 撮影した授業の紹介

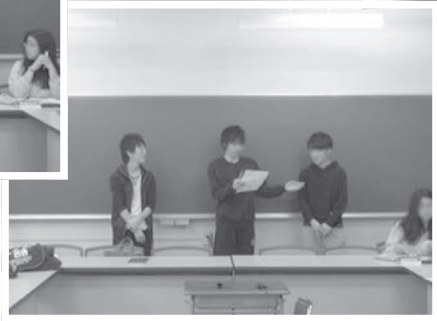
1) 構成



2)他己紹介のルール

3～4人で構成される班に以下のことをしてもらおう。準備期間は1週間とする。

- ①メンバー全員に共通すること、共通して関心があることを3つほど見つける
- ②もっとも共通性が高いと思うものを班名にする
- ③この科目における班の目標を立てる
- ④第2回授業で自分以外の人について氏名等を紹介し、代表が班の目標を発表する
- ⑤次に前に出る班から質問を受け、回答する



映像編集者より

メンバーの共通項を冠した各班の名称は、「フランスパン(班)」「数学苦手班」「アイス班」「スポーツ大好き班」「睡眠大好き班」と様々でした。経済学にも、教員にも、仲間にも不慣れなこの時期だからこそ、どんな話題でもいいので言葉を交わし、お互いを知り合うことでゼミへの参加を促したい、という意図からこの取り組みは行われています。どこの学部にもいる、ノリの良い学生、朴訥とした学生、シャイな学生たちが、勉強や人間関係への期待と不安を口にしていました。飯島先生は、この授業中に全員が何か言うこと、笑顔が出ることに気を配っていたそうです。編集した短いクリップで多くを紹介することはできませんでしたが、黙って聞いたり、反応が薄かったりする学生に目配りし、声をかける等の飯島先生の配慮が1時限を通して度々見られました。

3) グループ報告・討論のルール

1 回の授業で 5 グループ中の 3 グループが何らかの役割を担当する。

- ① 1 コマの授業で課題文献の 1 つの章を題材とする

〔課題文献〕

日本経済新聞社編、2013、『経済学者に聞いたらニュースの本当のところが
見えてきた』、日本経済新聞社。

- ② 3～4 名の学生で構成される 3 つのグループが、「報告班」「対立班」「司会班」
を担当する

- ③ 「報告班」は担当した章の要約を報告し、また、その章の内容から特定の論点
を取り出して、その論点について肯定的な主張を行う

- ④ 「対立班」は「報告班」の主張と対立する主張を準備して発表する

- ⑤ 「報告班」と「対立班」の主張の相違を焦点にして全体討論を行う

- ⑥ 「司会班」は当日の司会を担当する



映像編集者より

グループでの発表や討論をさせる上でどういうルールを設定するか。この点で悩んでいるという声を多く聞きます。飯島先生は、文献の要約を報告させて内容理解をはかった上で、対立する立場どうしを議論させるという方法を実践しています。根拠を挙げて主張し自分の立場を守ろうと試みる中で、本や新聞は鵜呑みにできない、人に簡単に説得されてはいけない、といった思考態度を身につかせることが目指されています。ワークショップでは、飯島先生が上記のルールを学生に対して説明する場面を視聴し、教職員で議論するための題材とさせていただきました。

4. ワークショップでのディスカッション

○**谷村** 時間になりましたので、始めさせていただきます。本年度最初のFDワークショップとして、経済学部会計ファイナンス学科准教授の飯島寛之先生が担当なさっている「基礎ゼミナール1」についてご紹介いただき、ご出席者の経験や問題意識もお聞きしながら意見交換していきたいと存じます。

また、意見交換の際には、当センターのセンター員で法学部准教授（当時）の幡野弘樹先生にファシリテーターを務めていただきます。よろしくお願いたします。私は進行を担当致します学術調査員の谷村と申します。本日はどうぞよろしくお願いたします。

最初に、副センター長の小澤康裕先生よりご挨拶を申し上げます。

1) 開会挨拶

○**小澤** 皆さん、こんにちは。お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。副センター長をしております、経済学部の小澤です。今回は、2014年度FDワークショップの第1回目として、飯島先生の授業を撮影した映



大学教育開発・支援センター 副センター長、経済学部 准教授 小澤 康裕

像をもとに、皆さんと議論していきたいと思っています。大学教育開発・支援センターでは、昨年度から初年次教育、初年次演習をテーマにしてこのワークショップを開催しております。といいますのも、2016年統合カリキュラムの一部として、「立教ファーストタームプログラム」というものが構想されています。この立教ファーストタームプログラムでは、入学してきた1年生に、最低限身につけてもらいたいリテラシーを中心に、全学である程度統一した内容を提供したいと考えております。今回、昨年度から引き続いてこのような企画をやっておりますのは、初年次に各学部がどのような授業科目を展開しているのかということ、実際に見て、情報共有・意見交換して、今後、同プログラムを実践していく上で参考にさせていただきたいと考えているからでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

2)授業の紹介

○谷村 今日ご紹介いただく「基礎ゼミナール1」という科目は、経済学部の自動登録科目になっております。内容としましては、スタディースキルの習得と、経済学への導入というのが主な目的となっております。14回のスケジュールとしては、標準的なものが『講義内容』の冊子に掲載されていますが、それを踏まえたくて、実際にどういった授業を展開するかは個々の授業ご担当者がお決めになるとのことです。例年、二十数名で構成されるクラスが30ほどありまして、兼任の先生を入れて20名ほどの教員で担当されているという状況です。ここで、飯島先生のクラスの授業につきまして、簡単にご説明いただけますでしょうか。

○飯島 あらためまして、経済学部の飯島です。よろしくお願いいたします。いま谷村さんから「担当者の裁量で内容が決まる」旨のご説明をいただきましたが、春学期の14回の中でやることは、ほぼ共通化されており、テキストを輪読しながら関連するテーマについて議論するというのと、もう1つは6,000字から1万字程度のレポートを中間報告および最終報告という2段階のチェックをかけながら、作成するということになっています。その過程で、テキストの読み方、レジュメ作成の仕方、報告や議論の仕方、そしてレポートの書き方のルールも学んでもらっています。

ただし、その配分や指導方法は教員の裁量に任されていますので、私の場合、今日見ていただく2回目の授業では他己紹介というのをやりました。私の場合、

1年次のゼミの課題の1つは、高校生から大学1年生になってもらう、大学生活になんとか着地して慣れてもらう、そのための環境をゼミの中につくっていくということにあります。他己紹介は、その方法の1つとして取り入れています。当然、自己紹介は1回目の授業で一人一人がやっているわけですが、その後の授業では、グループに分かれていると行動してもらうことになります。そのことを前提にして、グループ内でお互いを紹介し合い、深く知り合うための方法が他己紹介です。少なくとも自分のグループの中では、意見が言い合えるようになってもらう、ということを目指しています。

3) 新入学生をどうやってゼミに引き込むか―他己紹介による関係づくり―

[第2回授業で撮影した他己紹介の様子を視聴した後、下記のディスカッションを行った。他己紹介の概要については「2) 他己紹介のルール」(p.13)を参照されたい。]

○**幡野** では、ここから、ファシリテーターということで、私が進行役を務めさせていただきます。まず最初に、飯島先生から今年の学生たちについて感想を伺うとともに、今ご覧いただいたような取り組みの背景についても、もう少しお話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○**飯島** 1年生の友達づくりというのは、サークルとかいろいろなところでやられていると思うのですが、経済学部「基礎ゼミナール」は、興味があるテーマや担当者に惹かれて学生が入ってきているわけではなくて、学生番号順に切られて割り振られています。そういう中でどうやって真剣に学びあう仲間や関係をつくりあげてもらえるかと考えて、ああいう取り組みをしています。

昔、立教大学で助手をやっていたときや前任校にいた時に、最初の友達の輪や話し合えるような相手をつくるのがとても難しいと感じていました。特に前任校の場合には、サークル活動もあまり活発ではないところで、学生同士がつながり合う、あるいは分かり合うという場が非常に少ない。そこで、学生同士がまず輪になって話し合える関係をつくろうと考えて、始めたという背景があります。報告の態度や内容は見て頂いたように、まだしっかりとしたものではありませんが、授業中のあの時間にどうだったかということよりも、授業の前の段階でそれぞれが話し合ってくるということが重要だと考えています。

今年は去年と比べればやや元気がないかなと思います。それでも、(ビデオでの)学生の発言の中にもありましたが、お互いまだよそよそしい関係の中だけでも、できるだけ友達をつくっていきたいということを積極的に意見表明し、経済学という未知の勉強も頑張っていこうという気持ちを各学生が共有しているという姿が非常に強く表れていたなと思います。

○**幡野** ありがとうございます。今、映像にもありましたけれども、これが2回目の授業ということで、普通、多くの先生方は、自己紹介などは初回の授業の90分の中でパパッとやっておしまいということが多いかもしれませんが、飯島先生は最初のお互いの紹介というものに非常に重きを置かれているということがよく分かるものだったと思いました。皆様から飯島先生へのご質問やご感想など、自由にお聞かせいただければと思います。

笑顔が出るような語りかけ

○**小澤** 飯島先生は学生に語りかけて、いろいろコメントというか、ツッコミを入れていましたが、その辺は特にどんなことに気をつけて学生に声をかけていらっしゃるのでしょうか。

○**飯島** 学生が言っていました、あの場でウケを狙ったりすると必ずスベって恥ずかしい思いをするので、なかなか自分あるいは自分たちをアピールするのは難しいと思うんです。でも、やっぱり自分のことは知ってもらいたいからちょっとだけは自分らしさを言葉の端端に表現しています。ただ、自己紹介でも他己紹介でも、聞いている学生は基本的にそう真剣に細かいところまで聞いているわけではないので、私ができるだけ話が広がりそうなところを聞き逃さないようにしています。そしてなにより最初ですから、笑顔が出るような質問をするように心がけています。映像には含まれていませんでしたが、最後のグループの学生の一人はドッジボールで全国大会にいったと。ドッジボールに全国大会があることにびっくりしたりしたので、そういうところをちょっと広げたりということをお心掛けしました。

まずはお互いを知ることから

○**三澤** 拝見すると、みんな読み原稿みたいなものを作ってきているのかなという気がしました。その辺も先生が何か指示をされてやっているのか、それとも学

生が主体的にですか。

○飯島 「書いてこい」とは言っていないのですが、人前で発表することを意識して、さすがに原稿がないときついと思ったのだと思います。また、全員が全員、私が意図した形で話し合ってお互いにインタビューをしながら内容をまとめているかという、必ずしもそうではなくて、中にはそれぞれが書いたものを渡して読んでもらう、というような形もありました。その辺はもう少し改善すべきかなと思っています。それでも、他人について書いてあるものを読む、読んででも紹介するということが意味があるかなとも思っています。

○小澤 基本的には、お互いにインタビューし合って、それを紹介してくださいという形で説明なさっているんですね。

○飯島 そうですね。1回目の授業が15分ぐらい早く終わったので、「この後、教室がまだあいていますから、お互いに話し合って共通点をまず探して、どういう環境にあるのかを話し合ってください」と伝えましたし、時間がなければ、すぐ次の時間が「情報処理入門」という授業で、同じメンバーがそのまま同じ教室に移動することになっていますので、その移動時間とか授業後の時間に少しでも話し合っって仲間のことを知っていくように努めようとは指導しました。



左：飯島 寛之 経済学部准教授、中央：ファシリテーター 幡野 弘樹 法学部准教授（当時）

班の決め方

○三澤 班の人数が大体3、4名ぐらいですね。班の決め方で僕も毎回悩むんですが、興味・関心を出させてから、それに合わせて班を構成したほうがいいのかどうか。今回の場合だと、初めはランダムにつくって、その中で話し合って共通項を紹介しなさいという形でした。そうではなくて、初めに全員について把握して、そこから班を作るというパターンと、どちらがいいというのが経験上お分かりでしたら教えてください。

○飯島 今回は班を5グループ作ろうと思って人数を割り振って、基本的には男2人、女2人になるようにクジで班分けをしました。私は、共通項を持っている学生を集めて班にすることをしたことがないのですけれども、どうでしょうか。意外なことが出てくるという意味では、最初から共通性が分かった学生同士を集めて班をつくるというのは避けた方がいいのかなと思います。スポーツで全国大会に出るような学生がたまたま一緒になるということもありますし、意外性やいろいろな刺激がありうるのかなと思います。

仲間との共通項を探させる

○藤田 経営学部の兼任講師の藤田と申します。私は学界の人間ではございませんで、企業内の研修とか、そういう仕事もやっています。グループで、最初の基礎的な関係を築くというときに、やはり共通項を見出すということは重要だと思います。ですから、例えば、紙に「私の好きなこと」みたいなことを3分ぐらい書いていただきます。それを使ってグループ内で自己紹介をやります。そこで何か共通項がないか、「テニス好きなの」とか「ゴルフ好きなの」みたいな感じで、そうすると、心理的な距離がグッと近くなるんですね。そんなことをやったりしています。これは余談ですが、参考までに。

○飯島 他己紹介の準備の仕方として、共通項をたくさん出してもらおうというやり方もあり得るのですが、私は3つか4つの共通点を探してもらって、その中で一番相関が強いというか、一番共感しあえることを見つけて班の名前にしてくださいとお願いしています。先ほど先生におっしゃっていただいたようなことが重要で、話し合うプロセスで心理的な距離が縮まることを期待しています。

欠席者への対応

○**深野** 教務部の深野と申します。こういう最初のなれそめと申しますか、打ち解けようとするときに、学生によって乗れた学生と乗れなかった学生、あるいは、恥をかいてしまった学生とか、いろいろな学生がいるのではないかと思うのですが、その辺のリスクの回避とか、フォローのような工夫なりご苦労というのは何かありますか。

○**飯島** 残念ながらそういったリスクまではあまり考えていないですね。

○**幡野** 例えば、欠席者が出てしまった場合の対応はどうなりますか。初回とか2回目の授業を欠席した場合などは。

○**飯島** 昨年度から赴任して、これは2回目の取り組みなので、欠席者が出るというのは、今年も去年もなかったですが、欠席が出た場合でも、次の週にやってもらうという形かと思えます。学生が一番不満を持つのは、「私はやったのに、あの人たちは前に出てやっていない」といったことで、そういうことに対しては異常な反応を示します。共通して前に出てやってもらう。画一的なマニュアルのようなものはあり得ないと思えますので、それで失敗してしまったということが起これば、学生の性格などを踏まえながら臨機応変に対応していくしかないのではないかと思います。それについては今後考えていくべき課題であると思えます。

年齢が異なる学生がいる場合

○**三澤** 必修科目ではないので、もしかしたらあまり関係ないかもしれませんが、再履修の学生、学年が上の学生が来たときに、まわりは1年生の中で2年生が自分1人だけと。そういう学生はカミングアウトしづらくて、自分が2年生であるということをごまかしながら、1年生を装いつつ、どの流れでカミングアウトしようか探っているという話をよく聞くんですよ。そういったケースというのはありますか。

○**飯島** 経済学部の「基礎ゼミナール」は必修ではないので、1年次に単位未修得の2年生が入ってくることはありません。ですが、浪人生の学生がちょっと最初は言いづらいという環境はあるんですね。今年もありました。何年生まれかは聞かないと分かりませんし、そういった資料は私の手元にもありませんので学生に任せるほかありません。幸い昨年度も今年度も「僕は浪人生で」と一人、明るい学生が言ってくれたので、「俺もそうだ」と言って同じような浪人生が言い出

しやすくなるような、そういう話しやすい環境ができました。

授業外で対話させることが主目的

○徳永 文学部兼任講師の徳永です。他己紹介を第2回の授業でされていましたが、例えば、第1回で全部、話し合いから他己紹介までをするのは難しいのでしょうか。

○飯島 第2回にもってきている理由は、お互いが話し合うという環境を授業以外の場でつくるということですので、第2回の授業の前の段階に狙いがあるということですね。それから、初回は私が大学生生活とか、大学で学ぶとはどういうことかとか、1年間のスケジュールなんかを話していると、大体、時間が過ぎてしまいます。ですから課題である学生同士が話し合うという目的を考えると、やはり他己紹介は2回目にならざるを得なくなっています。学生は、初回の自己紹介と第2回の他己紹介で同じようなことを結局は話さざるを得ないので、つまらないような顔をする学生もいますが、それでも、自分で自己紹介するのではなく、他人を紹介するという新しい視点を付け加えることで、違う意欲で取り組んでくれていると思います。

○徳永 1年生だけは2回かけてという感じですか。2年生以上の演習でも2回かけて他己紹介などを。

○飯島 2年生の専門ゼミのほうでは、そういうことはしません。1年生ならではの悩み、課題があるでしょうから、それをお互いに話しにくい環境の中で共有しあっていくという趣旨です。専門ゼミの場合には、言葉は悪いけれども、放っておいてもやらざるを得ない環境の中に置かれますので、新しい人たちが顔を合わせるという意味では同じですが、抱えている悩みが違うかなと思っています。

録画して学生に見せる

○幡野 先生方の中で異なる取り組みというか、何かほかにこういう方法があるのではないかとか、そういうお話があったら、ぜひ教えていただきたいなと思いますけれども、いかがでしょうか。

○小澤 私も同じようなことを「立教ゼミナール」でやっているんですけども、全部ビデオを撮るんです。あとでそれをブラックボードに全部アップして、自分たちで見られるようにしています。髪の毛触っていたり、ふらふらしていたり、

自分では気がつかないのだけれども、変な癖がある学生が結構いますよね。そういうのを自分で見ると、すぐ気がついて直してくれるんです。自動的に次回から直っているんです。ちょっと手間がかかって面倒なんですけれども、ビデオを撮ったりということをされたらどうかなと思います。今回、自動的にビデオが撮れていますけれども、このワークショップのために。見せたら変わるかもしれません。

○飯島 先生の取り組みを伺うと、まず私が自分の映像を見ながら変わるのかもしれない。それは別として、ビデオを通じて自分の今の姿と成長した姿を確認するというのは有効的なのではないかと思います。毎回やると大変かもしれませんが、数回、自分の成長の度合いも含めて、そういう機会があってもいいのかなと思います。もうちょっと進んでくると、自分たちのゼミの中だけではなくて、ほかの1年生の同じ学科とか違う学科の人たちの前で自分たちの報告をしたりすると、またある種の違った緊張感や刺激が生まれるのかなと考えています。いま他の先生と調整をしたりしているところですが、秋学期に向けてマンネリになりがちな授業に刺激を与えるための新しい取り組みを考え中です。

他己紹介の使い方

○益田 法学部の特任准教授の益田直子と申します。法学部でも自動配置ということで、特にこれをやりたいから私はゼミに行きますというのではない、「基礎文献講読」という科目があります。その点では一緒であるということで、今日の先生の話を楽しみにしてまいりました。

ただ、ここまで制度化して、2回をかけてきっちりやらなければならない理由があるのかなと感じました。私のほうの取り組みとしては、初回に他己紹介をさせます。その場で二人組のペアになってもらって、この4年間で成し遂げたいこと、そしてその理由というものを述べさせます。その理由は2つです。1つはアイスブレイクがありますけれども、もう1つは、この4年間の目標など、みずからの意見を根拠とか理由を付けて説明するということになりますので、それがどこまでできるかなというところを探ります。この過程で、「どうしてそうなの」とか、「どういう経験があるの」とか、そういうことを聞きながらやっています。

2回目からは通常の授業に入るわけですがけれども、1回目の授業の他己紹介が終わった後に、「きみ、バンドをやっているんだね」とか言って、そのまま自然と集まって話したりしているのを見ると、やはり他己紹介はとても意味があるか

と思います。

1点、先生にお伺いしたいのは、やはりここまできちんと制度化して共通項、共通点を見つけるといことが、番号で切ったような形で集められた学生たちにとっては、やはり必要でしょうか。それをしないと、するときとでは、その後大きな違いが出てくるのでしょうか。

○飯島 先ほど少しお話しさせていただいたのですが、こういうことをやらなければいけないかなと思ったのが、違う大学だったので、本学の場合に、ここまでやる必要があるのかというご質問はもっともだと思います。実際、こうしたことをしているのは私だけで、他の担当教員は1回で行っているようですので、機会を見て見直しの必要もあると思います。ただ、私が求めるものが1回目で全部できるかと言われると、これは難しいかなと思っています。いずれにしても、学部全体として目標としていることは共通していますので、担当教員間、そして学部としてもっと検討を加えていく必要があるかなと思います。

○幡野 ありがとうございます。

4) 批判的思考にどう導くかーグループ討論を取り入れた実践ー

[グループ報告・討論の準備の仕方についてのレクチャーを視聴した後、下記のディスカッションを行った。グループ報告・討論の概要については「3) グループ報告・討論のルール」(p.14)を参照されたい。]

○幡野 先ほどのテーマと違って、3回目以降、どういう形で授業を進めていくかという仕組みづくりのお話が主たるテーマとなっております。お約束の時間まで、何なりとご意見やご質問をちょうだいできればと思いますけれども、いかがでしょうか。お願いします。

議論する場の前提をつくっていく

○稲田 文学部教育学科の兼任講師で稲田といいます。対立する2つの班を設定するという形式の中で、ちゃんとお互いを批判し合う議論になるのかということと、もう1つは、反論し合うということで、さっきリスクというお話が出てきましたけれども、その対立が後にしこりを残すようなことはないのかということ、この2点を教えて下さい。

○飯島 この場でこうってしまうのは何ですが、学生の主体に任せておいて最初からかみ合うことはないですね。専門ゼミでもそうですけれども、共通認識をつくり上げていって、その上でやっと何を、どのように議論するかがおぼろげに定まってきます。これはこちらがある定型を教えればすぐにできる類のものではないと思います。ですから議論を本当にかみ合わせようと思えば、何度も議論の場を設けて繰り返しやっていくしかないのだと思います。お互いが議論を詰めていって、根拠を付けてということを経り返さないといけないと思うんですね。

ただそのなかでも、こちらが望むものはやはり提示しておく必要があると思っています。そこへ行くまでに何が足りないかということについては、授業中の議論のなかでこちらからも提示しますし、最後に自分たちで軽くまとめをさせますが、こことここがすれ違っていたんだなというのを認識してもらうことが重要だと思っています。そこまでを視野に入れて、ビデオで示されたような形式を設定しています。

どうやったら議論を通じて自分たちの認識を深めることができるかという認識さえもってくればあとは学生が自由に発言するに任せています。人格否定をするような発言はもちろん駄目なのですが、学問として、「ここが間違っている」とかそういう対立というのはどうぞやってくださいと言います。ただ、なかなかそこまではいきません。遠慮もありますし、自分たちが正しいという自信が持てないようです。ですから、少なくとも「今、自分はこういうことを考えている」と、そこに少しでも根拠となるデータをつけて発表することができれば、相手にも自分にも刺激になってよいかなと考えています。妥協と言うとちょっと言葉が悪いんですが、それを繰り返し、繰り返し、やっています。

○稲田 今の話でかなりクリアになったと思うんですけども、私はその2つというのは割合パラレルだと思っています。以前、なかなか意見が出ないので、「どうして話をしないんだ」と聞いてみたことがあったんですけども、「自分が正しいことを言っているのかどうか分からないから不安だ」と言います。間違えてしまったときに、要するに恥をかくことになる。相手が違うことを言っているのに、自分が自信を持って言ってしまうと後になって困るのではないか、ということを行っている学生が複数いました。

やはり、人格を攻撃しているのと、意見をもって相手に反論しているのとは別のことだということを、前提としてちゃんと分かってもらわないと、議論自体も

深まらないし、関係をつくったり維持したりということにもならないのではないかなと思います。よく生徒会の会議規則に「議場内の責任は議場外で問わない」と書かれています。また、欧米の議論では、間違いがあってもいいから、みんななどにかくいろいろな意見を出し合って、いい方向に向かっていこうという前提があるとされます。そういう前提がちゃんと共有されないと、なかなか言いたいことをはっきりと言えないのではないかなと思いました。

○飯島 そうですね。少し違う話ですが、間違いを恐れるという点で言えば、「調べてきて」と言うと、大体インターネットでサラサラと調べてきて、書かれていたことは正しいんだという前提でそれだけを発言します。もちろん、内容の選択には個人の価値判断が含まれているのですが、「書かれていること」「載っていたこと」だけを発言する。学生にとっては、これ以上でもこれ以下でもないようです。これでは議論になっていきませんので、学問は、それが正しいかどうかを疑うという姿勢から始まるということを繰り返し言うようにしています。今までマルカバツかという世界で生きてきたのが1年生だと思っているので、その世界から外に出て疑問を持つこと、疑問を持つこと自体が世の中をよくしていくんだということを、言い続けるしかないかなとは思っています。

議論への参加と評価

○藤田 ゼミではないですが、僕が授業をしていて、「質問はありますか」と言うと、ほとんど手があがらないのが現状ですね。そこで評価と連動する必要があるかなと思っていて、例えば、アメリカのアンダーグラジュエイトの授業ではクラスコントリビューションというものも必ず見るわけですね。僕はとにかく、どんなプアな質問でも何でもいから、勇気を買いますよということで、すべてアドオンしてつけています。ですから、何かそういう仕掛けから入っていかないと、いきなり議論しなさいといっても変わっていかないのではないのでしょうか。言わないのが美德みたいになってしまっているから、その辺から今後、少し変えていかないといけないのかなと。今の話をお聞きしても、もっとベースのところをなんとかしないと難しいかなと思いました。

○飯島 そうですね。なにより「こう思うけどどうだろうか」という、発言をしていくということが、今の段階では必要だと思いますし、例えば会社に入ってから、そういう意識を持っていることが重要だろうと思っているので、植えつけ

ていこうとは思っています。ただ、やっぱり時間がたつにつれて、スーッと頭が下を向いてくるようになるので、それをいかに上を向かせて、口を開くチャンスを与えるかということですね。だから、最初のうちは指名という形にならざるを得ないんですけども、指名ではない形にどうやって変えていくかが課題です。たまに元気がよくて雰囲気をつくれるような学生が数人いると、場の雰囲気がガラッと変わってきますね。教員にできることとできないことがありますけれども、やっぱり考えていかななくてはいけないだろうなと思います。

各班の役割と批判的思考

○**村越** 日本語教育の村越と申します。今、「批判的思考をどう導くか」ということがトピックになっています。批判的思考というのは、具体的には、対立班と報告班に分けて、ある論点について議論するということを指しているのでしょうか。

○**飯島** 経済学部の「基礎ゼミナール」では、ある1つのテーマに関して新書程度の長い文章を読む力をつけるというのが主流です。私も去年はそういうことをしていたんですが、今年は、学生がいろいろなトピックに関心を持ち、それぞれについて考えられるようにするという点に力を入れています。トピックが多様に



なると1つずつの分量は短くなってしまいますが、短くても、それを筆者に内在的に読むということが報告班の課題です。それから、大学に入るまでほとんど経験してこなかったと思うのですが、批判的な考えを構築していくというのが、対立班の課題です。これらの2つのことをそれぞれの班に期待しています。ですから、ご質問の、批判的思考というのは、簡単に言えば対立班に求められるものです。各班の担当役割はぐるぐる回っていきますので、どの班も、そういうことを経験しなければいけないというような形で進めています。

○**村越** そうなった場合に、うまく対立したことはない、先ほど先生がおっしゃったと思うんですけども、どうやって対立の意見を生み出すか、そのあたりの工夫はないんでしょうか。

○**飯島** ある種、無理やりでもいいと思っています。学生にとっては知識がないからという理由で、常識とされていること、あるいは教科書に載っていることに対して批判を考えるということはあまりやりたいことではないと思います。だから批判的に取り上げるものは無理やりでもよいと思っています。むしろ重要なことは、そうして取り上げる理由が論理的なものになっているかどうか、どういうデータを使うか、それが自分とどのようにかかわる可能性を持っているのかといった点をまず考えてもらいたいです。それで、ほかの班から「それは違うのではないのか」と否定されて納得できるのであれば、「ああ、ここに無理があったか」といったことを認識してもらえればいいかなと思っています。現実には、先ほど言ったように、学生からはちょっとした質問が出てくるだけです。最終的には私が疑問や反論を出さなければいけない局面が多いのですが、それでも、そういうことにチャレンジさせることに重きを置いています。

課題の設定方法と、参加度を上げる工夫

○**徳永** 2点質問です。私も「入門演習」という授業を秋学期にやっています、6回か7回の授業で、同じようなことをやらせていただいています。その中で、課題を設定するとき、いつもほかの先生方の話を聞いたりするんですが、課題の設定の仕方をいつも考えています。専門が歴史なので、学生に、自分で図書館に行き、好きなテーマを選んでやりなさいというふうにやっています。なぜかという、図書館で実際に本を選ぶとか、論文を検索するとか、そういう作業が重要かなと考えているからです。ただ、今日は最初に課題を設定してしまうとい

うやり方をご紹介いただきました。やりやすさで言うと、こっちのほうがやりやすいのかなといつも悩むんですけども、その課題の設定のあり方についてもう少しお聞きしたいというのが一点です。

あと、各班の中で1人とか2人の学生が中心になってしまうという場合があると思うんです。昨年度ですと、報告する班が4人ぐらいいて、その中で、授業中に声を出して発表するだけの担当とか、そういうふうになってしまって、「それではちょっと困るんだけど」という話をしたりしました。その辺についてはどういうふうにやられているのか教えていただければと思います。

○飯島 課題の設定ですが、テキストは指定していて、先ほど言ったように、税の問題、貿易の問題、社会保障の問題等、いろいろなトピックにわたっています。私のやり方は、その範囲の中で自分たちが興味をもったトピックの章を選択してもらうというものです。それから各章の内容のうち、どこに焦点を絞って議論するかという点は、リジッドに設定しているというよりも、この点にしたらどうかというのを提案してくださいというふうに報告班にお願いしています。報告の日は最初から割り振って、何週間も前から分かっています。もちろん図書館に行っても構わないし、インターネットを通じて資料収集してもらっても構いません。またテキストとは別に、毎週学生には新聞を読んで興味をもったトピックを提出してもらう（注:p.64～65の資料参照）ということをしていますので、そういった現在起こっていることに関連付けて提案してほしいと思っています。

2つ目の点ですが、当日、声を出す担当がいるという事態にはまだ直面したことはありません。でも、やはりやる人に偏りが生じますね。学生が4人いれば、4等分してつくったレジュメを読むといったことが出てくると思うんですけども、問題は、自分が担当した部分にしか関わらないということによって、その部分を全体の中に位置づけられていないということです。全体の中で何がテーマになっているのか、全体としてどういう主張になっているのかということが、個々の学生が把握し切れていないことが多くあります。長い文章になればなるほどそういう傾向があるのですが、どういう対策があるのかということについては、むしろ何かいい案があれば教えていただきたいぐらいです。

たまに、いつもとは少し違うことを、無理やり順番を変えてやってもらったりしています。そうすると、次の週とその次の週ぐらいはドキドキしているんですが、だんだん慣れてくると法則性が分かってきますので長続きはしませんね。い

ろいろ試行錯誤するしかないかなと思っています。

○徳永 あと1つ。1年生の基礎ゼミで、最終的な目標というか到達点というのは、さっき新書1冊というお話もあったんですけども、どの辺を想定されているのでしょうか。

○飯島 いつも年度の初めに「基礎ゼミナール」担当教員が全員集まって、どういう形で進めるかということと、どういう目標を達成するかということは確認しています。どの辺というのはちょっと難しいんですが、新書を読むということそのものに目標があるわけではなく、それと教員の指導を通じて、少なくとも春学期で言えば、1つはレポートが書けるということでしょうか。具体的には、長い文章を一貫性をもって書ききること、きちんとした文章力を身につけること、レポート作成のルールを知ること、そして情報処理という別の科目ともかかわりますが、そこで学んだ技術をレポートにとり入れることかと思います。もうひとつは、議論を通じて新しい知見や考え方を知ること、相手の意見をよく聞き、自分の意見と比較検討すること、その上で、自らの意見を発すること、といったことになろうかかと思います。こうして並べるとやること、伝えたいことが多いですし、実際にはそれぞれの教員が重要視する項目も違いますが、そのあたりは会議によって情報共有しながら、学部としての目標に近づくように試行錯誤しています。

パネルディスカッションを取り入れた授業

○稲田 今、話す人が決まってしまうとか、なかなか全体的なところが見えないというお話があったんですけども、あまり例にならないかもしれないんですが、私はちょっと違うやり方をしています。前期に、やはりトピック別の文章を宿題で出して、次の週までにA4で1枚ぐらいにまとめてきてもらいます。授業では、みんなグループに分かれてA4の要約を持ち寄って、お互い読みあって、なおかつそこで15分ぐらい話し合いをしてもらいます。そのグループの中で、学生たちが理解できたことを1つ2つまとめてもらう。それから各グループの代表に前に出てきてもらって、パネラーになってもらいます。パネラーは、グループで討論したことをみんなに向かってしゃべらなければいけない。そういうルールにしておいて、パネラーの発表をみんなが聞いて、パネルディスカッションをするというやり方をしました。基本的にはグループの全員がパネラーをやるぐらいの回数、5回か6回ぐらいです。

このやり方だと、まず各グループの中で、ほかの人が何を考えていたのかが分かるし、パネラーの発表を聴いて全グループの共通点などもわかりますので、クラス全体の中で、自分の考えていたことがどう位置づくのかといったことも分かります。ある程度、全員がしゃべる練習ができるというのも取り柄になっているのかなと思っています。

その際、質問してくれた人には必ずお礼を言うことにしていました。「ありがとうございました」という感じにしてお土産をあげないと、なかなかボランティアに出てきてくれませんので、そのようにしていました。また、それに慣れるまでは順番を決めて、要するに、前回パネラーをやった人は質問する、みたいな形にして、なるべく切れないようにしていました。

アメリカのやり方がいいという考え方もあるんですけども、やはり今、対象にしている人たちは日本の社会の中で育ってきた学生たちなので、ある程度、順番にするとか、彼らの話しやすい環境をつくってあげないといけないなど、お話を聞きながら思いました。グループのほう話しやすかったらそのほうがいいし、順番に話したほうが話しやすいんだったら、きっかけとしてそれもいいなと思いました。

○**幡野** ありがとうございます。1年生向けの工夫という感じですね。

○**稲田** はい。1年生向けです。

議論への介入

○**神橋** 法学部の神橋です。今までの繰り返しになると思うんですけども、結局、1年生というのは専門知識がない状況ですよ。その中で、質の悪い議論に陥りがちだという部分があって、そのときに、教師がぐっと我慢して、学生に言いたいことを言わせるという度量が必要だと思うんですが、なかなかこちらが我慢できなくなってしまって介入せざるを得ない。そういう場面があると思うんです。特に私はそういうところが苦手なもので、つい言ってしまって、演説会をやってしまった終わりになったりすることがあるんですけども。そういう場合における、教師の介入のあり方について、まとめたいとお考えがあればちょっとお聞かせいただきたいのですが。

○**飯島** 私もととききイライラして気がついたら説教の回ようになってしまって自己反省をするんですが、1年生の場合には、相当我慢して介入しないように

しています。知識の問題、しゃべれないという問題、人それぞれなんです、質が悪くても話が進んでいるんだったら、方向を修正できるのかもしれませんが。しかし、多くの場合の問題は、すぐに話が行き詰まってしまうという点ですね。広がりがなくなってしまう。そこで、なんとか穴をあけて違う方向で議論をさせるために、ちょっとしたアドバイスをしますが、できるだけ最小限にとどめるようにしています。学生に知識がないということは大前提として、すっきりとした結論が出なくても、こういう議論が出て、こういう議論が出てと、その中に賛成と反対とがかみ合って、それを最後司会がまとめるというふうになればいいんですけども。そのために司会は、議論を回しながら意見を集約する能力を高めてもらいたいなと考えています。

○**神橋** ややもすると、2つか3つぐらい、考え方が対立する論点を扱うことがあると思うんです。以前、読書に関するシンポジウムをやったときに、政治学の助教の安藤さんがおっしゃっていたんですが、『三酔人経綸問答』（中江兆民著）に出てくる3人の考え方のうちどれがいいかという議論を初年次のゼミでしたんだそうです〔注：大学教育開発・支援センター編『「読む」学生が育つ大学教育を求めて―若者の読書実態と授業実践を始点として―』（大学教育開発研究シリーズNo.19）参照〕。授業を進める中で、学生は「先生は自分たちを特定の方向に誘導しているんじゃないか」と反発が来たというんです。そういう随分ご苦労な話があったので、教師の介入というのはどうあるべきかなと、質問させていただいた次第です。

レジュメ作成指導と文献の理解

○**佐藤** 映像身体学科の佐藤です。学生がつくってくるレジュメに関して、例えば、小見出しの打ち方や文言によってストーリーがもう少しはっきりするケースというのは多々ありますね。特に学生が打ってくる小見出しが何かまどろっこしくて、ストーリーが転がっていないというようなケースや、別の簡単な言葉で言い換えてしまえばもっと問題点が明らかになるのに、と思うようなケースというのではないですか。

○**飯島** 報告班の要約のレジュメに関しては、課題文献にある見出しなので、これ自体を変えることはないのですが、主張のレジュメの方は、わかりにくい場合があって、その時は、どう変えるべきかということ、その場、その場で指示し

ます。ただ、次の週も結局、形を変えて見づらいという資料が出てきてしまったりするのが実情です。本当はいろいろな形のレジюмеや個性的なポイントをついた見出しなどがあるのがレジюмеなのかもしれませんが、最初の段階でバリエーションを紹介してしまうと、学生が混乱しかねませんので、最初は形式ばったレジюмеの作成を勧めています。慣れてきた段階で学生の持ってきたレジюмеには「こんな形もいいね」「この表現はいいね」と言っていると、だんだんとルールに則ったうえで作成される個性的なレジюмеがでてきて楽しいことがあります。とはいえ、そうしたレジюмеに出会うのはまれで、大方はただテキストの主要部分を羅列しているという感じです。「これではメモ、あるいはノートだよ。君たちのノートをみんなに配るわけではないので、もっと他人の目を意識したレジюмеをつくってきてね」と言うんですが、毎回同じことが繰り返されています。伝え方が悪いのかなとも思いますが、その辺はちょっと苦労しています。

○佐藤 コントラバーサルなストーリーテリングというのが、おおむねあるんだろうという気がするんです。それは大体のことに当てはまるような気がして、いったんそういうことのスキルみたいなものをしゃべってしまおうかなと思うときもあるんですけれども、種明かしになってしまうのでよくないかなとも思っています。ともかく、明快で単純な転がし方みたいなものの知恵が、学生の側にどうもうかがえないというケースにしばしばち当たるんです。

○飯島 先日の授業もまさにそれで、通例私は助言するだけでテキストの文脈理解についてはほとんど口を出さないのですが、私が初めて課題文献の単純な論理の流れを説明したら、学生は「ほ～う、そういうことか」と言っていました。多分、全体を通じて何が言われているのか把握できていなかったのだと思うんですね。それが班内の分担による思考の分断によるのか、それとも難しい用語が分からないことによるのか、また考えていく必要があるかと思えます。

○幡野 約束の時間になりましたので、まだまだ議論は尽きないかと思えますけれども、これでおしまいにさせていただきたいと思えます。私自身、飯島先生のお話と、皆様のいろいろなご意見を伺って、ぜひ参考にさせて頂きたいということがたくさんありました。ご協力いただいた飯島先生に、感謝の気持ちを込めて拍手をするということでこの会を締めくくらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

参加者の声

神橋 一彦（法学部教授）

今回、ワークショップ「学生の学びをどうリードするか—初年次演習における課題と工夫—」において、経済学部の飯島 寛之先生の「基礎ゼミナール1」を拝見させていただき、あわせてディスカッションに参加する機会を得た。

周知のように、現在、大学の1年次教育においては、学生を大学にいかにか「着地」させるかということが、ひとつの課題となっている。私の場合、2004年4月に本学に着任後、2年間、法学部の基礎文献講読を担当した経験があるが、その後、法科大学院併任の関係もあって、10年近く初年次教育の経験から遠ざかって今日に至っている。この間、学生との年齢差も10年開いたことになるので、おそらく、いまいきなり同じ場に立ったとしたら、私自身大きな戸惑いを覚えることになるとおもわれるが、その意味で、今回の機会は、私個人にとって大変興味深いものであった。

拝見した授業において、飯島先生が最も意を用いておられた点の一つは、大学入学直後の段階において、高校では一般に経験のないゼミナールを成立させるために必要な基盤となる「場」をいかにかにして形成するか、ということであったとおもわれる。そのために、初回の授業においては自己紹介に多くの時間を割き、さらには回を改めて、グループにおける活動を踏まえた「他己紹介」を行うといった試みをしておられるのが注目された。ビデオによる授業見学であったので、ナマの雰囲気を感じることができなかつたのはやや残念であるが、今回、教師が学生の中に入っていく実践の場を拝見することができた。

このようなゼミナールの基盤となる「場」というのは、参加している学生相互間において形成されるべきことはいうまでもないが、他方において、学生と教師の距離感をいかにか縮めるかという問題とも密接不可分の関係にある。言い換えれば、教師がいかにか学生の中に入っていかにか、という問題である。その点、私が10年前に担当した基礎文献講読においては、若手の助手（当時）とペアでクラスを担当したため、助手に学生との間のブリッジ役をしてもらった。

その意味で助手の役割は大きかったといえるが、一般に初年次教育、とりわけ少人数の演習科目においては、助教を含めた比較的若手の教員の役割が、必然的に

重要になるとおもわれる。しかし他面において、仮に初年次教育を全学出勤で行うとした場合、年配の教員には、そこでどのような役割が期待されるであろうか。抽象論はともかくとして、具体的な授業においてどのような方法が展開できるであろうか。この点は、私自身が当日お話しや議論を聞きながら、自問自答していた点である。

さらに、初年次の学生の場合は特に、基礎的な知識そのものがない段階において教師はいかなる役割を果たすべきかという問題があり、ややもすれば教師が「教える」という方向に傾きがちである。この点については、当日、飯島先生からも、賛否両論の議論の中で、噛み合った議論になるように教師がヒントを出すように心がけているとお話を伺った。おそらく、これは初年次段階に限ったことではなく、学部段階の専門のゼミナールにおいても、程度は違えど同じ問題があるであろう。

今回の企画に参加して、改めて自分の学生時代を振り返ってみると、30年前の当時にしても、やはりゼミナールにおいてそれほど丁々発止やりあったという記憶が余りなく、しばらくして先生が話を引き取って説明して終わり、というのが多かったようにおもわれる。その当時は、大先生の手前であるし、マアそんなものであるとおもっていたのであるが、20年ぐらいたって、当時ゼミを担当しておられたその大先生が「沈黙の恐怖」というエッセーを書いておられたのを知った。読んでみると、我々のゼミを担当される数年前から既に、ゼミの発表が終わった後、ゼミ室が静まり返って、しわがき一つ聞こえない、さあどうするか、というのは大問題であったとのこと。ハハア、あの大先生にしてそうであったか、と苦笑した次第である。

そういう意味で言えば、現に今いる教師もゼミナールにおいて討論を行うことによって「知」の獲得に至るという経験をどこまで学生時代にしてきたかという、余り褒められた経験がなかったのかもしれない。ただ、それは大学の初年次（当時の教養部）において学生はほったらかしで、学部の3年、4年になって大先生のゼミに入るということで、その間のブリッジはほとんどなかったことも一因である。そして、既に指摘されているように、旧制の高等教育から新制に移行したものの、大学大衆化の時代に必ずしも適合しなかった初年次教育の問題がそこにあったと感じる。

そのようなことを考えたり、おもいだしたりしながら、参加させていただいた。私自身、学生を大学という場に「着地」させるため、教師としてどのような役回りを演じるべきか、ということも含めいろいろ思いを致す貴重な機会となった。改めて感謝申し上げたい。

第2部

批判的思考力を養うグループ討論型授業 —経済学部「基礎ゼミナール1」の取組み—

〔 第1部と第2部は経済学部「基礎ゼミナール1」(飯島寛之先生担当)を対象とした
連続ワークショップの記録です。 〕

1. ワークショップ概要

1) 授業見学

<授業科目> 基礎ゼミナール1 (経済学部)

※本科目の概要については p.10～11 を参照

<授業担当> 飯島寛之先生 (経済学部 会計ファイナンス学科 准教授)

<開催日時> 2014年6月5日 (木) 13:15～14:45 (3限)

<出席学生数> 19人

<見学者数> 17人

<見学方法> 見学者は教室側方に着席して見学した。



2) 意見交換会

<開催日時> 2014年6月5日(木) 14:50～15:40

意見交換会でのディスカッションの詳細は「3. 意見交換会」(p.50～)を参照されたい。



中央：飯島寛之先生、右：ファシリテーター 小澤康裕副センター長

2. 見学当日の授業

1) 構成

事前準備

<グループ報告・討論の準備>
報告班：文献の要約と肯定的主張の準備
対立班：否定的主張の準備
〔課題文献〕
「第10講 若者や非正規社員も、安心して働けるようになりますかー雇用の話」(日本経済新聞社編、2013、『経済学者に聞いたらニュースの本当のところが見えてきた』、日本経済新聞社。)

<全員の課題>
1週間で最も気になった新聞記事をコピーしコメントを付けて提出(毎週)

グループ報告・討論の概要については p.14 参照

教員による導入

出席確認、配布資料確認、授業構成の説明



ここから司会班が進行させていく

グループ報告・討論
(60分)

報告班が文献の要約を報告(15分)
質疑応答(5分)



報告班の主張(5分)
質疑応答(5分)

p.42の①と
p.43の②参照



対立班の主張(5分)
質疑応答(5分)

p.44の③と
p.45の④参照



クラスを
2つに分けての討論(20分)

報告班と対立班の対立点について討論

p.45の⑤と
p.46の⑥参照



締めくくり

2つのグループの討論の総括

p.48の⑦参照



グループ報告・討論の様子



終盤は全体を2つに分けて議論した

2) 討論の過程

① 報告班の主張

報告班は、下記の配布資料を用意し、非正規雇用を発展的に活用していくべきだと主張した。

非正規雇用を減らしていくべきか

2014年6月5日
9期

まず、今の日本の現状で企業側が正規雇用することは不可能なことです。そのため、非正規雇用の利便性を生かしていくことを第一に考えて就業していきます。

非正規雇用とは？
→ 期間を限定し、比較的短期間で契約を結ぶ雇用形態
現在日本の労働人口の3分の1が非正規雇用で働いている
Ex) 派遣社員、パートタイマー、アルバイト など

■ 非正規雇用のメリット

労働者側	企業側
<ul style="list-style-type: none"> 働き口の多様さ 女性の社会進出の促進 自由に仕事ができる 多くの企業で経験が積める 働きながら自分の夢を見つけることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 人件費が削減できる 随機に役に雇える 社員に教育に時間を割かず済む 非正規雇用の予算管理がしやすい

社会のニーズに合わせた多様な雇用形態には賛成！しかし、正規社員になりたいかたもなれない人は欲しない。

私たちは今のままの非正規雇用の前ではなく、**非正規雇用をより発展させていく提案**をしたいと思います。

- 非正規雇用の社員昇格制度
- ジョブカード
- 非正規雇用者でも政府の支援
- ※ 認定正社員の発用

雇用区分	契約期間の定め	写 像 表	
		労働者側	企業側
正社員	いわゆる正社員	安定な雇用 ※ 労基法第20条第1項第1号に規定あり	安定なし ※ 労基法第20条第1項第2号に規定あり
	認定正社員	なし	安定なし ※ 労基法第20条第1項第2号に規定あり
非正社員	あり	いずれかあるいは複数に規定あり	

※ 注1) 労働契約法により規定あり。

※ 認定社員
→ 労働内容や地域が限定された正社員のこと。非正規雇用と日本認定社員の中間的存在と捉える。プラス面としては、アルバイト・パートなどよりも雇える不安定な雇用形態からのアップアップ、企業側の選考などが受けられるようになる。就業内容に異なる報酬を払ってよいといったことがある。

まとめ

グローバル化が進む世界の中で、会員正社員にするような企業は少なく、海外で何らかの経済的メリットと大影響を受ける民間において、非正規雇用は必須の雇用体系です。確かに安定はしていませんが、その分仕事の働き口の多様性、自由さ、多くの経験を積めるといった強みのやり方次第で非正規雇用を有効活用することができます。また、今までできなかったような非正規雇用の待遇改善をすることが、より国民が充実した日々を過ごれると思います。

参考文献
2013年7月 19日 公開 『経済学者が驚いた！「ホームレス」の存在がとらえられなくなる』日本経済新聞
<http://sankei.jp/data/econ/13/07/13econ0719a.html> 『派遣社員とは？』トコトンウェブ
<http://tocon.weblio.jp>
http://www.w3schools.org/js/js_arrays.asp 『マイナビ』

②報告班の主張への質問

○**司会** ありがとうございます。報告班の今の主張について、疑問点のある人はいますか。この後、対立班に対立した主張をしてもらうんですけども、その前に聞きたいことある人いませんか。

○**質問者A** まとめのところで、海外で何か経済破綻が起きると……。

○**飯島** 聞こえません。

○**質問者A** まとめのところで、「海外で何か経済破綻が起ると影響を受ける現代において、非正規雇用は必要な雇用体系です」と書いてあるんですけども、海外の経済破綻と非正規雇用ってどう関係しているんですか。

○**報告班の学生** まず、もし海外で、海外のどこかの国が経済破綻をすると、日本に、今の時代だと影響が来ますよね、悪い意味での。そうすると、企業側としてはなるべくコストカットなどをしていきたいというようになって、そうになると、非正規雇用だと賃金が、まあ、言い方悪いんですけども安くなるので、そこで大量に雇ったりすれば、企業は人件費削減ができると考えました。

○**質問者A** 正社員より安いからいっぱい雇うようになるんですか。分かりました。

○**司会** ほかにはありますか。

○**質問者B** 非正規雇用の企業側のメリットの中の、ただ確認なんですけれども、社員の教育に時間を割かずに済むということでしたけど、バイトって、職種によっては研修があるところがあると思うんですけども、全く割かずに済むということですか、それとも多くの時間を割かずに済むということ。

○**報告班の学生** 多くの時間を割かずに済むということです。

○**質問者B** ありがとうございます。

③対立班の主張

対立班は、下記の配布資料を用意し、非正規雇用を増大させることに反対であると主張した。

平成 26 年 6 月 4 日
ふらんす組

非正規雇用者増大が経済に与える影響

○正社員と比べた非正規雇用のデメリット

- ・賃金が低く保険料も高くなる
- ・途中解雇される可能性が高い
- ・将来に受け取る年金が少なくなる
- ・社会的地位が低い

○非正規労働者を解く企業側からのデメリット

- ・会社独自の人的資本が蓄積されない
- ・企業ロイヤリティ(忠誠心)がない
- ・育てた高い能力を持つ人材が流出しやすい

上記のデメリットが社会に与える影響

上で述べたような状況に不安を抱えている非正規雇用者は少なくないと思われます。そのため将来に不安を感じ、高い賃金も野望傾向にあります。そのような正規雇用者が増えると日本全体の経済が縮小に向かってしまいます。

雇用形態	性別	平均賃金(千円)
正社員・正職員	合計	347.7
	男性	370.0
非正規・正職員以外	合計	219.0
	女性	221.0

平成 26 年 6 月 4 日
ふらんす組

図表5 望ましい働き方 そう思う(計) 96

望ましい働き方	正社員	非正規・正職員以外
会社のなかで昇進(出世)したい	~35	~15
大きな責任のある仕事を任せてほしい	~35	~15
パソコンや手帳などで、仕事を効率的に	~35	~15
業務に集中し、集中して、きっちり働きたい	~35	~15
成長の機会を得られなくても仕事以外の時間を大切にしたい	~35	~15
安定した雇用関係のもとで働きたい	~35	~15

出所: リクルートワークス研究所「50代男性の働き方調査」

(図表4) 現在非正規で働く理由

理由	割合
正社員での仕事が入らなかったから	56.8%
就業形態にこだわらずに仕事を獲りたいから	28.7%
そもそも正社員としての仕事に就けなかったから	12.8%

出所: リクルートワークス研究所「50代男性の働き方調査」

- ・「非正規という働き方」への誤解「正社員という働き方」への誤解
- ・参考文献: <http://blomond.jp/article/17262?page=1> (平成 26 年 5 月 4 日アクセス)
- ・「企業から見た正社員のメリット・デメリット」
<http://manton.blog21.fc2.com/blog-entry-118.html> (平成 26 年 6 月 4 日アクセス)

④対立班の主張への質問

○**司会** では、対立班の主張について、質問のある人はいますか。

○**質問者C** さっきの賛成側の意見のまとめでは、具体的な打開策が示されてあったんですけども、この反対側の意見は、何かデータが載っているような感じがして、具体的に何を行っていけばいいのかというのがわかりにくいのですが。

○**対立班の学生** まずこの議論が、非正規雇用が増大するかしないかということの問題にしているので、増大したらこういうことが起こりますよということを主軸に置いたため、そういうことはあまり考えてなかったです。

○**質問者C** そしたらこのままの流れに任せるといえるのか、現状でいいということですか。

○**対立班の学生** 必ずしもそうではありません。就職難と言われていますけれども、求人倍率は1倍を超えていて、職に余りがある状態なので、この職に若者が就かないというのが問題になっていると私たちは考えています。そして、そういった職に入れるような企業側の努力などを私たちは促してもらいたいと思います。

○**質問者C** 企業側の努力？

○**対立班の学生** はい。若者が中小企業に就きたいなと思えるような企業を目指してもらおうということです。

⑤その他の質問・コメント

○**司会** ほかに質問のある方いますか。これ以上質問がないようなら、次、報告班と対立班以外の方たちの意見を交じらせる時間になるかと思いますが、質問は大丈夫ですか。

○**質問者D** 質問していいですか。

○**司会** お願いします。

○**質問者D** この対立班の発表を踏まえて、報告班に質問なんですけれど、図表の5で、非正規雇用の人たちは、会社の中で昇進したいとかいうパーセンテージが低くて、契約期間が短く決まっているので、やる気があまり、正社員の人に比べてないと思うんですけど、そういう点はどのように解決していくべきなのか、何か考えがありますか。

○**報告班の学生** 先ほど述べたように、非正規雇用の社員昇格制度などで非正規雇用者も、やっぱり社員になろうと努力して頑張るし、あとは非正規労働者の中

でも、まあ、派遣社員とかになってしまうんですけども、その中でもランクづけとかをして、その中でも給料の差とかを出していけば、意欲的に、非正規社員でも働けるのではないかと考えます。

○**質問者D** 分かりました。ありがとうございます。

○**司会** ほかに質問のある方いますか。大丈夫ですか。それでは報告班と対立班以外の方たちで発言していない方があれば、どっちかに、今話を聞いている中で、賛成なのか反対なのか、自分の意見のある人はできるだけ発言してください。

○**意見がある学生** はい。

○**司会** お願いします。

○**意見がある学生** 私は非正規雇用の増大には反対の立場です。報告班が挙げたメリットの中に、労働者も自由に仕事を選べるし、あとほかに離職もしやすいというメリットがあります。たしかに、やめたいときにそっちに行きやすい、正社員より退職しやすいというのはあると思うんですけども、転職を繰り返していくと、どうしても信頼性がなくなると思うんです。「前の企業どうしてやめたの」、「何でこんな短期間でやめたの」みたいになって、人格的に本気が足りないみたいなふうにとらえられてしまうと、転職しづらいと思うんで、それがデメリットなのと、やはり安定性に欠けると思って、企業側が経費を削減しやすい、臨機応変にやれるというのは企業側の都合で、非正規雇用者は、突然失業してしまう。そういうデメリットを背負ったまま、非正規雇用であり続けるのは、労働者側としては望ましい形ではないのかなと思っています。

○**司会** ありがとうございます。

⑥飯島先生の補足説明

[質問・コメントが出なくなった後、司会班は、全体を2つのグループに分けて少人数で議論するという方法を選択した。その前に、飯島先生は次のような補足の説明を行った。]

○**飯島** ちょっと分かれる前に、カラーのコピーのやつ〔注：飯島先生が用意したレジュメ〕を見てください。報告班と対立班が、こんなにいっぱい、いつもと違って図表を持ってくるとは思わなかったので、私が補足的に準備をしました。報告班の主張のほうに「現在の労働者人口の3分の1が非正規」と書いてありますが、

それを一番上の図表を見てもらって2013年のところで確認できます。全体の労働者に対して、今、非正規という形で、具体的に言うとパートとかアルバイトとか、契約、嘱託という形ですが、こういう人が3分の1を超えて36.7%。その図を見てもらえば分かると思いますが、ますます非正規という形で働く人たちが現実が増えていくと。皆さんも、あと何年？

○**学生** 働くまでですか？

○**飯島** 就職するまで。2年とちょっとぐらいで就職活動するわけ。本学の場合には97%ぐらい就職率がありますが、しかし、社会全体で言えば、1回就職しても、3年間その会社をやめてしまうという人が結構いる。その後どういう形でやりたいことを見つけれられるかというときに、とりあえず非正規で働くという可能性も、皆さん自身もあるわけですね。最初から働けないということはあまりないと思いますけれども、その後の段階で、あるいは皆さんが結婚した場合に、奥さんとか旦那さんになる人が、そうなる可能性もある。

さらにその下の図を見てもらうといいと思いますが、24歳までですね。つまり大卒ぐらいで働いているという人の非正規の割合は近年変わっていませんけれども、年齢が高くなっていけばいくほど、非正規という形で働く人が経年的に増えています。つまり皆さんの知り合いでこれぐらいの年齢の方はいるし、お父さん、お母さんもこのぐらいの年齢にだんだん差し掛かってくるかもしれません、決して他人事の話ではないというのが、この非正規のあり方ですし、これから皆さんが何十年か働いていく中で、非正規という課題に直面せざるを得ない。だから、何か他人事のように報告を聞いている感じがありますが、決して他人事の話ではないということを前提に、どうしたらいいのかということを考えてください。

その1つの典型が、報告の途中でもありましたが、正社員とそれ以外の短時間で働いている人とで、賃金格差がこんなに生じるよというのが一番下の図。議論で何か補足の役に立てばと思って配っていますので、それも踏まえて賛成か反対か、あるいはどういう形で雇用というのを進めていくのがいいのか。自分の意見と立場をはっきりさせないと、ここにいる意味ありませんし、考えないと何も進みませんので、できるだけ自分の意見、根拠を持ってしゃべれるように、今から頑張ってください。

○**司会** では前回と同じように、半分に分かれて、そこからまた賛成、反対の意見を出し合っていくと思うので、各班、半分に分かれてください。

⑦ 締めくくり

○**飯島** 時間の関係もあって今日は短めの議論時間でした。ただ、長ければ答えが出るものでもないですし、皆さんが調べてきた範囲で全て正しいことが出るわけでは決してありませんので、色々な意見が出たり、新しい見方というのが発見できたりすれば構わないと思います。どういう意見が出たかということと、全体の流れがどういうふうになっていたかというのをそれぞれ簡単に紹介してください。

○**司会** こちらでは正規雇用を増やす仕組み、環境を整えることによって、結果として非正規雇用を減らして、正規雇用を増やす環境を整えるということにまともりました。

○**飯島** まとまったの？ 本当にまとまったの？ 大丈夫？

(中略)

○**学生** いやもう、議論の方向がかみ合わなかった。

○**飯島** では、そっちは。

○**司会** こっちは、非正規雇用を現状維持するか、減らしていくかというふうに分かれて議論をして、最終的には司会も入れて、現状維持が6、減らすのが4で、一応現状維持が…。

○**学生** 勝った。

○**司会** 勝ったということなんですけれども…。

○**飯島** 具体的にはどんな話が出た？

○**司会** やっぱりみんな、非正規ではなくて正規で働きたいと思っていると思うので、そういうことも含めて、報告班が提案した限定正社員制度を使いつつ、現状を維持していけばいいのではないかというほうが優勢でした。

○**飯島** なるほど。それが丁度具体的に紹介されたただけなので、具体的にどういうふうに使われているかといったことは、理解の範囲を超えているけれども、そういう方法も新しく知ったし、そういう方法で何か1つの解決になるのではないかなという意見が優勢だったということですね。

さっき**〔注：学生の名前〕が言ったけれども、多分、自分が思うような議論とか、自分が思うような主張ができなかったと思いますので、最後に、次、どういうふうに関心を持って改善していくかというところを、1分ぐらいで書いて出して

ください。

(以下略)

—授業終了—

13. 意見交換会

○小澤 本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございました。飯島先生、今日は授業を見学させていただいてありがとうございました。

○飯島 ありがとうございました。

○小澤 では、皆様からご感想、ご意見をちょうだいできればと思います。

1) グループ討論でなにを獲得させるのか

○小池 社会学部のメディア社会学科で文章実習（注：記事・調査報道入門）をやっています兼任講師の小池といいます。質問ですけれども、これはつまり2年次以降のゼミの、いわば前段になるという考え方なんですよね。

○飯島 基本的な技能を身につけるということはその通りです。ただ学生番号で割り振られて集まっている学生ですから、一人一人いろいろなことに興味をもっています。そこでまず、「基礎ゼミナール」では、スキルの習得とともに経済学のどの部分に興味があるのかという自分自身の関心が定まっていくことを期待しています。2年次以降のゼミと連続している部分として、考え方とか、レポートの書き方とか、そういうところはこの基礎ゼミナールで身につけてもらって、それぞれの興味を深めていくのは専門ゼミで、ということになっています。

○小池 こういう取り組みには敬意を表しますけれども、1年生に求めるというので、大分2年生以降と意味が違うと思うんですね。つまり、すごく難しいなと。取り組みは素晴らしいけれども、やっぱり難しいなという感想をもちました。私も文章実習でグループワークができないかとずっと考えてもう7年目ですけれども、うまくできていないんです。

文章実習の場合は少し別なだけけれども、知識を問うのかどうかという問題ですよね。おそらく、そうではない。そうでないと見ていて分かります。僕が言っているのは、例えば、就活の小論文で求められるものは知識ではないし、理解でもない。私に言わせると、認識なんですよね。つまり、その問題を自分に引きつけてどういうふうに認識するかという問題だと。

ですから、この授業で求めているのが知識ではないとして、今の話だと、関心を持たせて、ある程度こういうグループとしての作業に慣らさせるというようなことだと思うんですけれども、そういうことでしょうか。

○飯島 そうですね。あとはグループでの報告の際に、自分たちには何が足りないのか、どうしたらいいのかということ、自分たち自身で認識してもらって、それを高めていけるように手助けできればなとは思っていますが、なかなか現実的には難しいです。今日の学生の感想にもありますが、結局、知識がないから議論が広がらないと。一面ではそういう側面が当然あるんですが、では知識とか、いろいろな言葉の意味を教えたら、それで議論が広がるかという決めてそうではないと思います。そこら辺にまだ受験勉強的な思考が残っていて、みずから学んで考えていくというところへの移行ができていないのかなと思います。

○小池 そうということになると、それこそ内発的に進めていくのはかなり困難になりますね。私も7年目だけれども、1年ずつ見ていくと、内発的な部分が少なくとも増えてはいない。減退しているとしか考えられない。こういう条件の中では、そこを刺激していくのはかなり工夫が要るだろうなという感想を持ちました。

○小澤 ありがとうございます。

2) 学生にとってのゼミの難しさ

○寺崎 私も先生方がおっしゃった難しさという点を本当に感じます。はるかな昔、55人を10のグループに分けてテキストを読むという1年間のゼミをやったことがあるんですね。あの1年間の苦しさ、相当に苦しかったということ、今日思い出しました。今日は20人足らずでしたか。

○飯島 そうです、19人ですね。

○寺崎 19人であっても、やっぱりかなり難しいなと思いました。今日改めて僕が思ったのは、議論の対立点を見つけ出すとか、それから相手の言っていることの一番大事な部分を見つけ出すとか、そういった能力を学生たちはもっと鍛えられる必要があると思いました。特に司会の学生たちの不徹底さですね。あれをもうちょっと後半は鍛えていかれたらいいのではないかなと。チェアパーソンシップというのがすごく重要だと思うんですけども、今日はその働きがあまり見られなかったように思います。

○飯島 はい。

○寺崎 それから途中で飯島先生がアナウンスメントなさいましたね。あれはとっても僕、いいと思って、「君たちにとってひとごとではないんだよ」という、あの話ですね。あれはとっても学生にいい影響を与えたと思います。

つながりでもう1つ申しますと、報告班の論に対して、対立班というグループがありましたね。その対立班の学生が非常に大事なことを言っているのに、誰もそれを広げられなかったということがありました。例えば、対立班が「非正規雇用を減らしていくべきだ」と主張しているのに対して、「非正規雇用をより発展させていくべきだ」という報告班の提案がありました。この「発展」というのが全くはっきりしない言葉で、何を言おうとしているか分からないですね。それを理解する側は、「増加させていい」と受け取ったみたいで、それに対して批判しているわけです。その理解をもとにしてね。報告班としてはどうも、「私たちは増大ということには反対で、量として現状維持であればそれでいい」ということが言いたそうなんだけれども、そこが伝わらず議論がその先に進まないという感じでしたね。僕としては非常に残念でした。

○飯島 そうですね。先ほど先生がおっしゃったような、何が問題になっているか、対立点は何かということをお互いにすり合わせてからスタートするということできていないし、その意識があんまりないんだと思います。本当はもっと丁寧に、私自体が「こういう論点で」とか「こういうポイントで」とか言うべきなのかもしれません。今日は討論の時間がいつもよりちょっと短くて15分か20分ぐらいでしたけれども、これくらいの時間ではワンテーマでしか語れない



と思います。ですから、どこが対立していて何を話すべきなのかということが分からないまま何となくふわっとしゃべっているところを少し改善していく必要があります。先ほど司会の役割が重要だとおっしゃっていたのはまさにそのとおりだと思います。

○**今田** 大学教育開発・支援センターの今田です。私は後ろで話し合っていた学生たちに近かったんですけども、女子の司会の学生は最初から分かっていて、仕切り始める前に、きちんと、対立は何だったのかという点を自主的に整理していました。私は職員なので、授業のやり方については分からないんですけども、見学できた範囲では、学生はできるかどうかは別として、与えられた役割についてはかなり分かってきているなという感じを受けました。

○**飯島** ただ、それを実際に行動に移すためのスキルと経験がまだないので苦労しているのだと思います。私自身だって、うまくできるかどうか微妙なところがあります。ですから学生自身にそういう苦労を経験してもらって、どう行動すべきかという自分なりの解を見つけてもらう機会になればと思って少し放置して様子をうかがっていることも多いです。もちろん、最後に何が良かったのか、悪かったのか、私からのコメントと自分たちの反省がないと改善にはつながりません。これをやれば常にうまくいくというものは多分ないと思うので、基礎ゼミの中で試しながら、1個ずつでもいいものを探して、次に取り入れていくという姿勢で臨んでもらいたいと考えています。

○**小池** 全く勝手な感想で、この授業に限ったわけではないんですが、やっぱりこういう役割分担というようなやり方しかないんですかね。前から残念に思う。詳しくないけれども、基本的にあれは役割を分担して決めておいて、そこである役を演じさせてという形でしょう？だから、自分でやっていないからあまり偉そうなことは言えないけれども、役割分担を徹底させる、一種、演じさせるということで、最終的に自分の意見や批判的な思考力を持つということにきちんと結びついていくものなのかどうか、私はやや疑問があるんです。ただ、別にやり方があると言っているわけではないんですけどもね。今の学生には向いているかもしれないけれども。

○**寺崎** もう一つ言わせてください。学生たちにとって、やっぱりプレゼンテーションの訓練は必要なんだなと実感しました。センターが配っている Master of Presentation は、やっぱり伊達ではない、非常に重要だと思いました。もうちょっ

と大きい声でしゃべれるようにまずなってほしい。はっきり聞こえるのは先生の声だけですよね。

○飯島 そうですね、今日はいつもの3割ぐらいでしたかね。

○寺崎 そうでしたか。

○飯島 いつもすごく元気な学生の声小さ過ぎてびっくりしましたけれども。

○寺崎 緊張したのですね。

3)課題文献とどう関わらせるか

○青木 今日は非正規雇用に関するテキストが与えられていて、1つのグループは主としてそれを要約するような形で報告し、肯定的な主張をする。もう1つの班は、ある種の反対論を考えなさいということになっている。その作業をさせるときに、「読んでみて感想を」というようなレベルなのか、何らかの課題を与えたり、例えば「必ず日経の関係のある記事を事前に読んで考えること」といった何らかの指示みたいなものはあるんですか。

○飯島 最初の段階ではそういうことも言うんですけども、なかなか言ってもできませんね。しかし、しっかりそれをやってくる学生とやってこずにただ来ている学生との議論の深まりは格段に違いますし、その意味でバラつきがでてくるのは事実です。ですから、最低限やってくるように言っているのは、報告班は、とにかく自分がその著者になり代わった形で、何を聞かれても著者の側の観点から説明できるように、内在的に読んできなさい。対立班は、著者の考えでどこかひっかかったところに、いちゃもんでもいいから、何でも反論しなさいということです。そういった中でどれが正解かとか、ここがよかった、悪かったというところの反省が学生の中に芽生えてくれればなと思っていますけれども、なかなか難しいですね。

○小澤 学生たちは、2カ月ちょっと前は高校生ですからね。

○寺崎 そうなんですよ。

○小澤 受験勉強しかしたことなくて、与えられたものを吸収して、それを吐き出すことだけの作業をしてきたわけで、自分で調べて、考えて、発言しろと大学で急に求められても、なかなか難しいですよ。

○小池 そういう意味では、1年生には有効だと思いますね。すぐに効果が出るというものでもないと思うけれども。あと個人的に言ってしまうけれども、そも

そも、この日経のテキストは、はっきり言って公平ではないところがありますよ。年越し派遣村のイメージ悪化なんていうのは、これはかなり一方的な判断でしょう。そういうことに対して学生の側が少しでも疑問を持つかということ、まだ1年生だからそこまでは行かないわけですね。

○寺崎 今のその問題で言うと、学生のビリーフ、個人的信念と、それからこのテキストの著者の立場ですね。それと、さっきのグループ分けによる役割分担という問題。この3つについてどんなふうに見たらよいかということなんですが、私はもう現役のころには割り切っていました。例えば、これは言葉を通じてのゲームだと思えばいい。言語を通じての。だから、「あなたはこの時間はそういう立場に立ちなさい。お互いにゲームしよう」という姿勢のほうが、むしろ学生には分かりやすようでした。我々の世代はそうはいきませんけれどもね。どこまでも信念で対立してしまう。でも、若い学生たちが、だんだんと言葉のゲームはできるという風になってきたなと感じるようになりました。

○御手洗 自分の意見とか信念によって分かれて、というと学生は答えを出せない気がするんです。むしろ、論理ゲームだと思ってやってみてと、教員が役割を振ってあげると、ようやくちょっと考え始めることができるんだと思います。

○寺崎 そうですか。



○小池　そうですね。よく分かります。

○飯島　では、「これが教科書だ」と、「これを学びなさい」というような言い方ではないほうが客観的にとらえるチャンスが生まれるということですかね。

○小澤　教科書というと、やっぱり正しいことしか書いていないと思ってしまいますよね。

○飯島　そうそう。テキストに書いてある内容は学んで、身につけるものであって、それは「覚えなければならない」対象でしかなかったわけですから、それに疑問を持つなんてしてこなかったわけですからね。小池先生の言われるように、このテキストに示される考え方は偏っています。それゆえに私も「学生でも疑問を持ちやすいかなあ」と思って指定したのですが、思い通りにはいかないものです。

今日一番びっくりしたのが、「年越し派遣村という行事がありまして」という学生の発言がありました。行事と言ってしまうのかと思いましたが、それが学生の認識というか、世の中のとらえ方なのかなと。ほんとに他人事のような感じでずっと報告していて、誰にでもそういうことが起こり得るんだとは考えてなかったですね。

私の専門は金融論なんですけれども、金融論とか言われると、もう架空の話をしているみたいな感じになってしまって、身近かと言われると、かろうじて株価を知ってるというぐらいですよ。今日はたまたま雇用がテーマの章で、学生にとって非常に身近な問題だなと思っていたのですが、それでもこういう感じかと思いました。

学生は自分とのつながりが分かれば一生懸命取り組むんだと思うんです。だから、まず自分に関係があることだという認識が大事です。特に今日の学生たちは政策学科の所属なので、もし政策に意欲があるとすれば、どんなテーマにせよ、もう他人事ではいられないということをもう少し認識させたいなという感想をもちました。

それと、学期末までに個人でレポートを書いてもらうので、一人一人の関心を広げたり、より一層考えてみようという気にさせるためにも、いろいろなトピックを学期の前半で扱っています。また、そういう関心づくりという趣旨で、個人で興味をもった新聞記事を所定のフォーマットで毎週提出してもらっています(注：p.64～65の資料参照)。そういうことを重ねて、どんなレポート書かか、

どうやって深めていくかを考えてもらいたいと思ってやっています。

4) 学生の発言とレジュメ

○**深野** 教務部の深野です。小澤先生が先ほどおっしゃったことに僕は非常に共感していて、僕は30年ぐらい前に立教大学の経済学部1年生だったんですけども、あまりの違いにびっくりしてるんですね。大学入って2カ月ちょっとで、こんなにしゃべれるのかと正直そこにびっくりしました。今日19人の学生さんがいて、全員が発言していました。19人が全員、90分の中で1回はしゃべるといことが僕にとっては驚きだったのと、あと、全体が2つに分かれたときに、進行役がいるんですけども、コミュニケーションのラインが次々にできていきました。その間の取り方とか、決して1人だけにしゃべらせないといったことをどうやって教えたんだろうなと思って、そこにもびっくりしました。確かに今は声が小さい学生、大き過ぎる学生がいます。でも、人とコミュニケーションを取るのに距離だとか人数で、どの程度のボリューム、トーンだったら十分なのかといったところが分かってくると、もっと穏やかな会話ができるのかなと思います。それは多分、経験だと思うし、ここは経済学部のゼミなので、ファシリテーションやグループダイナミクスの専門的な勉強をするところではないので、そんなにすごい達成感はなくともいいのかなと。それは4年間で達成していければいいと思うんですけども。そういう意味では、1年生であそこまでいくというのはすごいなというのが正直な感想です。

○**小澤** 1年生は語学も忙しいし、いろいろなところで課題が出されて、それに追われるようなところがあって。そのなかでここまでやっているのは、まあ頑張っているなというのは確かに私も思いますし、自分が大学生だったときのことを考えると、相当頑張っているなと思いますね。

○**御手洗** それと、今日のレジュメですが、私はすごく分かりやすいと思いました。報告班も対立班も。

○**今田** レジュメだけではなくて、説明も上手でしたね。

○**御手洗** そうですね。課題文献に書いていないところは、ちゃんと別の資料で補いつつ、まとめを書いていて、その発表もうまくできていました。

○**飯島** いや、僕もびっくりしました。今までのものと比べると、「やればできるじゃないか」と。

○小澤 じゃあ、毎回授業見学来ますか。

○飯島 それはやめてください。

○御手洗 学生は結構時間をかけたのではないかなと思うんです。今日までに飯島先生は点検や助言などはしていないのですか？

○飯島 全然していません。今日いきなり学生たちが持ってきたものです。毎回、「駄目だ、駄目だ」「ここはこうした方がよいのでは」と言っているのを、それを意識してくれれば、最後はいいものができるのではないかなと思っています。それが少しは身になってきたんだと信じたいですが、今日はよかったですね。

○谷村 先ほど、発言の声小さかったという話があったんですが、発言の数としては、普段と比べてどうでしたか。

○飯島 数はあれぐらいです。大体1人1回以上は発言しますね。私から何回も、「しゃべらないと来ている意味がないし、ほかの人の意見を聴くんだったら、それを聴いたなりに、自分の意見なしでもいいから、まとめてもう一回しゃべるとか、そういう形で少しでも参加してね」ということは強調しています。それにしても、今日はいつもと違う環境ですから、いつもより頑張った人たちは数名いましたね。

多分、議論には加われないから、最初の質問で何とか声を出しておこうみたいな学生が何人かいて、さっきトイレで会ったら、「僕にはあれが限界でした」って言っていましたけれども。

5) 学生の変化

○谷村 第1回ワークショップで、この授業の2回目の学生の様子を映像で見ました。学生たちは相当変わっているなと思ったんですが、その変化というのは飯島先生はどうお感じですか。

○飯島 そうですね。簡単に言うと、大学生活にも、私のやり方にも慣れたということが変わったように見える一番の原因ではないでしょうか。それでも、まだいろいろ試行錯誤ですし、しゃべらない人は、やっぱりしゃべれないなりにモヤモヤして悩んでいるんだと思います。それはもう、別に間違ってたっていいし、でかい声で話している人が必ず正しいわけでもない。多数決で負けたとしても、ここで何か人生が決まるわけでもない。だから、ちょっとずつでも自分の意見を表明していくということが重要だよと言い続けた結果なのではないかなと思います。

す。でも、この慣れが進んでくると、今度逆に、だら一としてくるので、それをいかに先延ばししながら緊張感を保つかという点が、またこれからの別の課題です。

6)ゼミの人間関係とコミットメント

○**深野** 僕はおとといの第1回ワークショップで、リスクという言葉で先生に質問してしまったんですけども、僕らも学生と30年近く接していると思うんですが、いろいろプログラムをつくったときに、何人かの学生が「やらされている感」を感じて「大学側の言うことに従いたくない」みたいになってしまう。授業ですから、従うのは当たり前なんですけれども、あまり仕組みれると、その仕組みでいること自体をすごく拒否するという学生はいないのでしょうか。

○**飯島** 私は2年目なんですが、今のところそういう極端な例には出会ったことがないですね。ただ、事前にあれがこれがと仕組みていくと、たいてい思いどおりにいきませんし、いろいろなことを提案してみて、学生の反応を見ながらということを繰り返していくしかないかなとは思っています。むしろそれは経済学部での経験の長い小澤先生に聞いたほうがいいかもしれません。どうでしょう。

○**小澤** そうですね。反発する元気のある学生が少なくなったのかもしれませんが、私がやってきた中では、そういう態度を明らかに示した学生はあまりいないですね。結局、少人数だと、学生のお互いの関係によってそういうことが減っていくというか、巻き込まれてしまうという面があるんだと思います。「俺はやりたくない」みたいなのを出してしまうと、友達に相手にされなくなってしまいうるか、仲間から1人だけ外れてしまうことになるので、それを結構怖がっているとこもあって、結局コミットしてしまてやっていくというところもあるのではないかなと思います。ですから、その辺はそんなに困ったことはないですね。

○**青木** 友達をつくる一番基礎的な単位ですからね。

○**小澤** ここはそうですね。

○**青木** 各学部がもっている1年生用の入門演習系の科目というのはどこでもそうですね。昔みたいな一般教育や全カリの現行科目では基本的に友達がつくりにくい。ある程度の範囲で友達をつくるということが難しい仕組みに今してしまってますからね。

7) グループ作業と成績評価

○**谷村** 2回目の授業では、レジュメ作成などで困ったらオフィスアワーやメールを利用して質問できるというアナウンスがありました。今回のレジュメは事前に助言等はなかったということですが、ほかにどれくらいあるのでしょうか。

○**飯島** 1件来ただけです。あとはもう学生が自力で。まあ、自力でやってくるから、授業で怒らなければいけないんですけれども。レジュメの作成自体は、経済学部オリジナルのハンドブックや大学教育開発・支援センター作成の Master of Writing を熟読すれば、そう外れるようなことはやらないと思います。だから問題は、どういうふうにかいたらいいのかという点で壁にぶつかるかどうかなんです。最近では便利な世の中ですから、ネットなどで調べればそれなりのものでできてしまいます。でもその壁が何なのか、どうやって乗り越えて話をつなげていけばいいのかはじっくり考えなければその場しのぎの報告になってしまいかねません。教員の役割は、学生が解答に行きつくまでのヒントを提示して、自分で考えてもらうことだと思いますので、そういったスタンスでレジュメの作成や自分の意見の確立、議論の方法などについて助言しています。これから学生はレポートを書くことになりますが、レポート作成の指導でも同じです。

○**青木** では、その段階では、だんだん個人作業というか、個人ごとのパフォーマンスを評価するという方向に寄っていくんだと思うんですけども、今日のようなグループ作業が後期もこのクラスは続くんですね。

○**飯島** はい。秋学期は英語の文献を読んで、要約して、それを材料にしてまた議論をする予定です。その要約も班ごとにやっていきますし、予定ではその後、グループ論文をつくって、みんなの前でプレゼンテーションもしてもらいます。ですから、1年間で言うと、個人でやるのは本当に春学期の次のレポート作成ぐらいで、基本的にはグループ単位で動いて、お互いにチェックし合いながら進め、できないところはゼミでみんなの意見を聞きながらクリアしていくという形で進めていっています。そうなるも私だけでは手一杯になっていきますので、できるだけ早い段階で自立できる学生になってもらいたいですし、場合によっては学生同士が助言しあえる関係を作りたいと思っています。

○**青木** 今日のような感じだと、無理やりグループ間で優劣、例えばどっちが勝った、負けたというようなことは重要視しないということですか。

○**飯島** 議論での勝ち負けということにはそれほど重きを置いていないですね。

まずは自分たちの論理構成をしっかり組み立てるということに力を注ぐことが重要だと思っています。

○**谷村** グループ討論の授業が全部で5回ありますが、この部分については個々の学生の成績評価にどういう形で反映されるのでしょうか。

○**飯島** 今回の目的は、読むとか調べるといったことなので、そう差が出るということはないと思いますが、先ほどもお話ししたように、拙くてもよいので自分の言葉で表現しようと努めている学生に対して評価を高くしています。でも、たいいていそういった学生は自分の意見に自信をもてずに意見表明ができずにいることが多いので、全体を見回しながら話のきっかけを与えなければなりません。もちろん、欠席などがある場合は、授業に参加できないということですので、この前半部分の成績の評価の違いに表れます。ただ、今の段階ではほとんど横並びで評価も難しいですね。

8) 学生と教員の親睦

○**谷村** 新入生と教員の親睦を深めるという点で、授業外で何かなさっていることはありますか。合宿にいく学部なんかは、合宿がそういう役割も果たしていると思うのですが、一緒に食事をしたりといったことはないのでしょうか。

○**飯島** 昨年は年度の終了時にみんなで食事に行きましたが、今年はまだないですね。ただ、経済学部の基礎ゼミナールは専任教員で担当しているのが4人と、助教が9人で、残り9人は非常勤の先生にもお願いしている状態です。非常勤の先生にどこまでお願いできるかを考えると、大学にいることの多い専任教員が学生との接点を増やしすぎても、違いが出てきてしまうという問題があります。

9) グループ発表を聴く側の課題

○**小澤** 学生にメモ用紙みたいなものが配られていましたよね。あれには、具体的に何を書かせたんですか。

○**飯島** 通常の授業でもそうですが、聞きながらメモするのは、学生にとってなかなか難しいらしいですね。だから、こういう討論の場で、話がトントンと進んでいくのを、まずメモするようにしています。それにいちいち反論するということはなかなか難しいと思うんですけども、そのきっかけを与えるというのが狙いです。それから最後に、もう2つ書いてもらっていて、1つは自分の意見

が議論を経て変わったのか変わらなかったのか、その理由は何なのか、ということ。もう1つ重要なのは、次回どうすれば、よい討論になるかという気づきを書くように言っています。知識が足りないという学生もいますし、進行のスピードを速くするとか、議論が進んでいる方向を見きわめて簡潔にしゃべるとか、いろいろ反省点ができますが、自分に何が足りなかったのかというところをいったん認識してもらって反省してもらえたらなと考えています。

○小澤 分かりました。ありがとうございます。そろそろお時間ですが、よろしいでしょうか。では、今日は本当にお忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございました。飯島先生、ありがとうございました。

○飯島 どうもありがとうございました。

資料 新聞記事課題のフォーマット

経済学部 基礎ゼミナール

新聞記事抜粋・メモ

==注意事項==

- ①新聞は「日本経済新聞」「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「産経新聞」「東京新聞」から一つ（どうしても場合には事前に相談すること）。また、スポーツ面、地域面、テレビ欄は不可とし、できるかぎり経済にかかわりのある記事を選択するように努めること。
- ②1週間に1つ、もっとも関心のある記事についてまとめることを基本とするが、忘れてしまった場合でも1週間のうち最大2つの記事まで。
- ③下記の「==見出し一覧==」に提出回ごとの新聞記事名を記入する。
- ④各回の課題ページ表面には、日付、記事名、内容、新しい知見、疑問の項目いずれも記入し、裏面には、新聞記事の切り抜き（図書館などの新聞を利用した場合にはコピーの切り抜き）を貼り付けること。貼ってから表面を書くとしわが奪って書きにくいので、表面を書いてから最後に貼り付けるほうがよい。

==見出し一覧==

	記事名・見出し	教員確認
第1回		
第2回		
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回		
第9回		

記事貼り付けページ

新聞記事課題（第 回）

【新聞名・日付・朝夕の別】

新聞 2014年 月 日（ ） 朝・夕

【記事名（ない場合には自分で見出しを考える）】

【内容（簡潔に）】

【新しく知ったこと】

【疑問・もっと調べ必要があると思ったこと】

参加者の声

深野 毅 (教務部)

今回、私がワークショップに参加させていただいたのは、教務部という部署にいながらにして、実は普段あまり接する機会のない教育現場に自ら足を運び、少しでも体感したいという思いからでした。大学職員というのは、大学生とほとんど接する機会がない部署に配属されることもあります。にも関わらず、「教育改革」などの担い手の一端を担わなければなりません。配属された部署で学生と接する機会が少ないのであれば、自ら足を運ぶ機会をもつべきだろう、そう思って参加させていただきました。

今回拝見させていただいたのは、経済学部「基礎ゼミナールⅠ」（飯島寛之先生）でした。4月の授業風景をビデオ見学させていただき、6月の授業は実際に教室で見学させていただきました。

4月の授業では、学生の授業へのコミットを高めるとともに、ゼミナールとして欠かせない学生相互のコミュニケーションを高める「他己紹介」が行われており、大学教育のスタートである学部1年次の、そのさらにスタートである4月の授業として、学生の立場に立った工夫がなされていると感じました。4月というのは、学生も期待と不安でいっぱいの中、おそらく学生自身も「華の大学生活、スタートで失敗したくない」と緊張していることと思います。この失敗したくないという気持ちは重要で、頑張ろうという気持ちが表に出せない学生もいますし、表に出し過ぎて逆に「やり過ぎた」と思う学生もいると思います。単に一人ひとりの学生の意識を表に出そうとするだけでなく、それを受け止める「受け手」である学生の様子にも注意していなければならなかったことと思います。4月のビデオ見学では、学生は「喋る役割を担っているから」「自分の番だから」発言していたのかもしれませんが、その折々で、飯島先生のフォロー、優しさが随所に見られ、この点にも工夫や心配りされておられることが、よくわかりました。

6月の授業では、飯島先生のフォロー（肯定的な意味での「介入」）は4月の授業に比べ、とても減っていましたが、学生たちのディスカッションは実に見事でした。誰も発言を強制せず・されず、他者の意見を遮らずに聞き終えてから発言する姿、独り善がりのリーダーや仕切り屋、扇の要が現れずに複数の回路で意

見交換されており、「役割」や「自分の番」ではなく、人に伝えたいという自らの意思から発言している様子が伺えました。4月からわずか2か月で、このようなディスカッションができるまでに至っていることに、私は何よりも驚きました。学生たちはコミュニケーション、ファシリテーション、グループダイナミクスなどのいわゆる大人たちが課せられる「研修」など受けていないはずですから、学生たちを頼もしくさえ思いました。

飯島先生の的確なご指導のもと、自分の意思から語ることを経験した学生たちは、この後どのようなことを学んでいくのか、追いかけて見学してみたくありませんね。スタートとして順調であった後で、おそらくこれからは経済学の専門的な学習や、この基礎ゼミナールの主眼でもある「批判的思考力を養う」を、どのように経験し、苦勞し、身に付けていくのか、とても楽しみです。その時々での飯島先生のスイッチの切り替えの様子を私自身が学びたくくなりました。

また同時に、おそらくは経済学の専門家としてのキャリアパスを歩んでこられた学部の先生方が、どのように、このようなコミュニケーション能力を高める手法を学んでこられたのか、(きっと相当なご苦勞があったものと思われますが)それも是非、お伺いしたいと思います。

最後に、教務部職員としてワークショップに参加させていただき、この「参加者の声」に寄稿させていただく機会を頂戴し、心より感謝申し上げます。現在、教務部では、「教務部研修体系の整備」を進めており、私はその整備チームの一員として様々な調査・分析を行っているところですが、その中で次のような文献にあたったことを思い返しました。

「教務職員の活動目的には、単に業務分掌に記載されている項目を穩便に処理することより、一人ひとり異なった希望をもつ教員や学生の教育研究における満足度を向上させるということの方に重点があると思う。そこは、教員や学生一人一人の個性に合わせ、個別的な意思疎通が数多く展開されている場面である」「教務職員は(学生・教員・職員の:(注) 深野)三者をまとめる場面に立っている。テーブルワークではなく、1対1のコミュニケーションである」「教務業務の活動が円滑に進むための条件は、三者の意思統一が成立するときである」(各務正「大学運営における教務職員の役割」広島大学高等教育研究開発センター『大学職員研究序論』2003年3月)

今般の参加は、教務部職員が実際の教育現場に足を運び、教員・学生の意思を体感することの大切さを、改めて感じる機会となりました。

第3部

アカデミック・スキルと 問題意識を培うコースデザイン —コミュニティ福祉学部「基礎演習」の取組み—

1. ワークショップ概要

1) 授業見学

<授業科目> 基礎演習（コミュニティ福祉学部）

<授業担当> 柴崎祐美先生（コミュニティ福祉学部 福祉学科 助教）

<開催日時> 2014年7月2日（水）10：45～12：15（2限）

<出席学生数> 24人

<見学者数> 10人

<見学方法> 見学者は教室側方に着席して見学した。



2) 意見交換インタビュー

<開催日時> 2014年7月18日(金) 9:30～10:30

<インタビュアー> 谷村英洋・御手洗明佳(センター学術調査員)

授業見学当日は、柴崎先生にほかの授業や学内業務があり、意見交換会が開催できなかつたため、後日インタビューをさせて頂いた。詳細は「4. 意見交換インタビュー」(p.84～)を参照されたい。



左：柴崎 祐美 コミュニティ福祉学部助教、右：御手洗 明佳 学術調査員

2. 「基礎演習」の概要

1) 目標と授業内容等

コミュニティ福祉学部の初年次演習科目（必修）として春学期に開講される「基礎演習」の概要を以下に示す。

春学期 / 2 単位 / 必修
◇授業の目標 大学での主体的な学び方について考え、準備を行う。基本的学習技術を習得する。学部の特徴や専門性について理解した上で、自分の将来設計を考える。
◇授業の内容 アカデミックアドバイザー（教員）1 人に対して 20 ～ 25 人で行う。 授業内容は各アカデミックアドバイザーが専門性を生かしながら、講義を展開していくが、上記目標を達成するために、次のようなことができるよう主体的に学び、参加することを期待する。 1) 立教大学、そして大学生活のスタートを円滑にするために、大学を知り、友人をつくり帰属意識を高める。 2) 基本的学習技術（主体的学びの方法、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションなど）について理解を深め、図書館やメディアセンターなど大学のさまざまな機能を自ら活用できるようになる。 3) 学部・学科の専門性を理解した上で、4 年間の学びの計画を立て、卒業後の進路を考えることができる。
◇成績評価方法 出席参加状況（出席、リアクションペーパーや小レポート、課題の達成度などを含む）(70%)、最終レポート(30%)

注) 同学部の『講義内容』冊子(2014 年度)より抜粋して作成。

2) 授業スケジュール

基礎演習（柴崎先生クラス）のスケジュールは、以下のとおりである。網掛けした第12回が今回見学した授業である。なお、第6回から第13回までの一連の授業の流れについては、「4. 意見交換インタビュー」（p.84～）で紹介している。

1	4/16	オリエンテーション	
2	4/23	V-Campus の紹介、ボランティア活動の勧め	
3	4/30	図書館オリエンタリング	
4	5/7	新入生歓迎会	福祉学科合同
5	5/14	書評発表（ビブリアバトル風）	
6	5/21	身の回りにある社会問題①	文献講読（岩田正美ほか編、2003、『社会福祉の原理と思想』、有斐閣。の1章より）
7	5/28	身の回りにある社会問題②	関心を持った新聞記事持参
8	6/4	データの読み方、探し方、見せ方①	コンピュータ演習室使用
9	6/11	データの読み方、探し方、見せ方②	//
10	6/18	発表準備	
11	6/25	身の回りにある社会問題③ (グループ発表)	
12	7/2	グループ発表の続き、 レポートの書き方	
13	7/9	身の回りにある社会問題④	ビデオ視聴
14	7/16	まとめ	

※網掛けはワークショップ当日

13. 見学当日の授業

1) 構成

事前準備

<グループ発表準備>
Cグループ：「子育て支援の実態と課題」
Dグループ：「低所得者援助の実態と課題―見えにくい貧困―」
Eグループ：「医療ソーシャルワーカーの実態と課題」

教員による導入

挨拶、授業構成の説明

グループ発表
(3グループで60分)

<1グループあたりの流れ>
発表 (10分)

聴いている各グループから感想・質問
(3分程度)

教員がコメント (良かった点、改善すべき点)
(5分程度)

どの班もスライドとそれを印刷した配布資料を使って発表を行った。

p.75の①参照

レポート執筆に関する
レクチャーとワーク
(25分)

テーマ設定のポイント (10分)

レポートで守るべき形式
(間違いさがしワーク) (10分)

引用方法や提出方法に関する注意点
(5分)

p.78の②参照

終了

2) 授業の様子

①グループ発表へのフィードバック

○学生 (Cグループ) では、これから私たちCグループの発表を始めます。

○学生 (Cグループ) 僕らのチームは、「子育て支援の実態と課題」について調べました。

(中略：Cグループの発表)

○学生 (Cグループ) ご静聴ありがとうございました。

○柴崎 まず、時間の管理はばっちりです。ありがとうございました。質問を受けてください。それでは、各グループから質問、感想、何でもいただきたいと思います。今日はリーダーさんの左隣に座っている人からお願いします。質問でも感想でも何でもいいです。

○学生 (Aグループ) 4人全員の話し方がすごく、聞いている側に訴えてくるような、アイコンタクトとか、声の出し方とか強調とかがすごいと思いました。

○柴崎 では、Bグループさんお願いします。

○学生 (Bグループ) ただ調べただけの考察ではなくて、ペットを飼うとか、自分たちでユニークな案を出すのは、すごいなと思いました。

○柴崎 Dグループさん、お願いします。

○学生 (Dグループ) パワーポイントの文字とグラフの割合がいい感じで、すごく見やすかったです。

○柴崎 Eグループさん。

○学生 (Eグループ) 感想なんですけれども、身ぶり手ぶりで、ここを見てくださいますかというのがあって、すごく分かりやすかったし、注意が引きつけられていいプレゼンだったなと思いました。

○柴崎 最後、Fグループさんお願いします。

○学生 (Fグループ) ただグラフを見てその結果を読み上げるのではなくて、ベビーシッターが増加しているとか、そういう別の話につなげているのがよかったし、皆さんすごく堂々としていて、アイコンタクトも真正面だけではなくて、ちゃんと全体を見渡せていたので、とてもよかったと思います。

○柴崎 ほかにぜひ言いたい質問、感想がある人。ぜひ言っておきたいことはありますか。大丈夫ですか。では、ありがとうございました。

さすが2週目になってプレゼンテーション技術がアップした感じがします。今、いっぱい褒められました。私のほうからは多少聞きたくないとも言いますね。まず、表紙なんだけれども、一応、大学で出すものだから、名前は漢字にしてください（注：スライドではアルファベット表記だった）。漢字でフルネームにしてください。実はほかのグループも、名前を書いていない人が多かったんですね。学校に提出するもの、発表するものは、表紙となるもの、レジメだったら一番最初に名前と学生番号を書くというのが決まり事だと思ってください。かわいくていいんですけどもね。次回は漢字でお願いします。

このグループはタイトルが「子育て支援の実態と課題」なんだけれども、今振り返って、このタイトルはどうですかね。タイトルがこうでしょう。それから次に動機が、「子どもたちの生きにくい環境に対する対応への疑問」があって、目的になると「子どもたちの現状と課題を明らかにする」となって、ここの3枚がちよっと…。

○学生（Cグループ） 矛盾していますね。

○柴崎 自分で気付いてしまいましたね。一番の骨格ですよ。今回、一枚一枚のパワーポイントの内容は豊かだったと思います。それは分かったのですけれども、最初の3枚の矛盾が後々響いてきちゃう。途中から、今度はシングルマザーの話になっていくので、だったらもう、「一人親世帯の支援」とかいうタイトルでもよかったかもしれない。このグループは、最初から何をやろうか、すごく迷いがあったでしょう。その迷いを最後まで引きずってしまいましたね。

あとは、背景のところシングルマザーが出てきて、これは皆さん共通ですけれども、シングルマザーというのは聞き慣れている言葉というか、初めて聞いたわけではないですよ。聞いたことがあるような言葉であるほど、定義というのを気にしてみてください。このグラフの中でも紹介してくれたので、死別、離別、あとは婚姻関係なしで子どもを持った人たちを指すのだなと分かったと思います。プラス、では、例えば母子以外の家族と同居していても、シングルマザーとしてこの統計に入っているんですかね。お母さん、子ども、おばあちゃんとか。その人たちがこの中に入っているかどうか。あと、お母さん、子どもというときの子どもの年齢はどこで切りましょうかね。20歳なのか、18歳なのか、15歳なのか。そういう、シングルマザーというなんとなく共通理解ができているような言葉なんだけれども、だからこそ定義というのを気にしてみてください。

あとは、虐待の統計の難しさも説明してくれてよかったと思います。古いということも自覚していましたが（注：スライドは平成16年の統計を引用していた）、児童相談所に相談があった虐待件数というのは、国が毎年統計をとっています。もちろん全部の数は把握できないんだけど、児童相談所が把握している虐待の件数とその内訳というのは、去年か一昨年の実数までは出ていますので、もうひと頑張りするともっと新しい統計が出たかなと思いました。

あと、ここは中身がいっぱいあったから、シートを分けてもよかったかもしれませんね。子育て支援だけでももう1枚説明がくれたのではないですか。ちょっとみんなメモをとるのが大変そうでしたね。

最後に、結果から考察の飛び方は、グループでつくったときに、あまり違和感はありませんでしたか。ちょっと言葉を補えばよかったんだと思うのね。結果のほうは、下3つが経済的支援ですよ。でも、みんなは多分、そうではなくて精神的な支援も必要だと思ったんですよ。であれば、その説明がきちんとあると、つなぎがよかったかなと思いました。

1枚1枚はよくできていましたから、最初の3枚の関係を、骨格をきちんと作ってから中身を詰めていくと、よりよかったと思います。ありがとうございました。

では、次のグループいきましょう。お願いします。



②レポート指導 ―間違いさがしを活用した指導―

○柴崎 それでは、残りの時間で、レポートの説明をします。ここまではグループ発表でやってきましたが、最後のレポートは個人作業です。問題意識がはっきりしている人は、個人作業のほうがやりやすいですね。問題意識がはっきりしていない人は、グループ作業のほうがやりやすいかなと思います。最後は個人で頑張ってください。(中略)

今回、各グループで調べて発表してもらいました。何らかのテーマについてある程度、知識を身につけた、という状態だと思います。今度はそこから知りたいたことをさらに深めてください。自分で問いを立てて答えを導く。信頼できる情報を調べて考察をするということを期待しています。

(中略：テーマ設定の手順・ヒントについてのレクチャー)

○柴崎 レポートの中身もさることながら、やはり形式も重視したいと思います。そういうことで、A4の紙を1枚配りました(p.82の資料参照)。このレポートには間違いがあります。何個間違いがあるか、グループで話し合ってもいいので、5分ほど探してみてください。5分たったら、何個間違いを見つけたか、皆さんに聞きますね。一人で黙々と探すもよし、みんなでしゃべりながら探すもよしです。



(5分経過)

○柴崎 答え合わせをしていきます。こんな間違いはしないだろうとみんな思っているかもしれないんだけど、結構みんないろいろなレポートを出してくれますよ。まず、実はこれ、ページレイアウトが違うんです。余白設定が上下30mm、左右20mmの40字×40行（注：コミュニティ福祉学部指定のページ設定）になっていません。それから、段落の始め、これは字下げしていません。1字下げてください。

○学生 どこの字下げですか。

○柴崎 ここがこうでしょう。

○学生 ああー。

○柴崎 各段落の最初は1字下がりますよ。それから、2のところ、レポートの基本は「である調」で書きます。でも、ここは「あてます」「設定します」となっています。あと、ここは「第3に」が2個になっているんだけど、これも最後の見直しが足りないですね。それから、レポートはいくら分かりやすくしようと思ってくれたとしても、下線を引いたりはしません。レジメのときはいいですよ。レジメのときは、どうぞ下線を引いたり、字体を変えたりしてください。でも、レポートに下線は要りません。それから、「4.結果」のところ。まずこの見出しだけがゴシック体になっていますね。明朝でつくったら、明朝で統一してください。それから、数値は半角を使いましょう。これは全角で「14.3」%になっていますね。「26.8」は半角になっていますよね。数値は半角で。それから、「12.5ポイント高かった!」、びっくりマークも要りません。

○学生 でも、伝わったよね。

○柴崎 伝わった?!高かったという感じは伝わったよね。でも、大丈夫。先生は読めば伝わるから、びっくりマークがなくてもちゃんと感じますから。

それから、表のタイトルは上にも書きます。図のタイトルは下にも書きます。えーっという感じだけれども、多分みんなはあまり意識していないだけで、普段読んでいる本に出てくる図表のタイトルはそうなっていると思います。あと、このレポート、ページ番号が入っていません。入れてください。たとえ1枚2枚であっても、ページ番号は入れる。

裏にいけます。考察のところ、2段落目。ここで「佐藤C男先生」の書いたものから引用がされています。いくら書いた人が先生であっても、レポートは呼

び捨てでいいです。例えば、みんなが知っている福祉学科の先生が書いた本を引用して、何か呼び捨てにするのはな、と思うかもしれないけれども、「さん」とか「様」とか「先生」とか入れなくて結構です。そして、引用したときは後ろに「佐藤 2008、56」と。これは入れてください。間違いではないかと言っていた人がいますけれども、これは何をあらわしているかという、佐藤 C 男先生が 2008 年に書いた本の 56 ページにこういうことが書いてある、ということです。

それから、2 段落目の終わり、ここの「・・・」の余韻は持たせなくて結構です。きちんと言い切ってください。

あと、本文の最後ですね。こういう反省文は要りませんから。皆さん今笑ったけれども、書いてくる人たまにいますからね。「次は頑張ります」とか、次はないと思って結構です。

最後の 4,989 字は何が問題かということ、最後、文字数をカウントしてくださいとおっしゃる先生もいるので、書くことは悪いことではないんですが、そもそもこれは 40 × 40 だから、1,600 字の 2 枚程度で、3,200 字ぐらいのレポートを期待しているんですよ。それに対して 5,000 文字近く書いたというのは、ちょっと多すぎです。何枚程度と言われたら、そこは守るようにしてください。多ければいいというものでもないです。

そして、引用文献のところですけども、これはルールが全く守られていませんので、見直してもらいたい。次に、この人は「介護福祉士あっちゃんの日々」、アメブロ (Ameba) を参照しています。一見、アクセス日まで書いてあっていいような気がしますが、レポートのときには、ブログは使わない。まして本名を名乗っていないような人のブログは、やはりレポートのときの参考文献としては不適切です。このあっちゃんがどんな人か、施設長なのかもしれないし、新人さんかもしれないし、介護福祉士ではないかもしれない。本名を名乗っていないホームページは使わない、ブログも使わないと思ってください。

あと、ウィキペディアですね。ウィキペディアも、どうでしょうかね。情報としては信頼できますかね。最近、だいぶ信頼できるページも増えてきたような気もしますが、ウィキペディアで何か用語を調べるのだったら、どうぞ福祉用語辞典とか、百科事典とか、そういうものを見てください。ウィキペディアについては、使っていておっしゃる先生もいるかもしれないですけども、私の授業では使わないようにしましょう。なので、さっきのブログもそうだし、ウィキペディ

アもそうだし、そのページに関して誰が責任を持っているのか。本名を名乗っていない人、どこの誰か分からない人が書いたホームページはレポートには使わないと思ってください。

そういうようなところに気付いてもらえればよかったかなと思います。中には、こんな間違いはしないのではないかと思うものもあると思いますが、これは結構見たことあるものばかりです。なので、覚えておいてください。

(中略：引用や提出方法等に関する注意事項の伝達)

最後、注意事項が続きました。相変わらずうさ先生だなと思うかもしれないけれども、4年間ずっと響いてくるマナーですから、1年生のうちに覚えましょう。では、ここまでにします。レポートについて分からないことがあったら、どんどん質問に来てください。

それでは、緑の紙（リアクションペーパー）とフィードバックシートを出していただいて、終わりにします。

—授業終了—

資料 間違いさがし用のレポート

社会福祉施設職員の離職と職場環境

立教花子 (14IB999A)

1. 背景

社会福祉施設の職員は一般に離職率が高い職種の一つと言われている。介護労働安定センターの平成 22 年度介護労働実態調査結果によれば、訪問介護以外の指定介護事業所で働く介護職員の離職率は 19.1%であり、それらの離職者の約 8 割が勤続年数 3 年未満であった。(後略)

2. 目的

本研究の目的は、社会福祉施設職員の離職と職場環境との関係を明らかにすることである。施設種別や職種による差があることが予想されるため、本研究では介護保険制度施行後、施設数の増加が著しいデイサービスセンターの介護職員に焦点をあてます。また職場環境とは、運営主体、施設の所在地、事業運営年数、施設定員、職員数とし、3つの作業仮説を設定します。具体的には、第1に運営主体は離職率に影響する、第3に施設所在地の人口規模は離職率に影響する、第3に施設規模は離職率に影響するである。

3. 方法

上記の作業仮説を明らかにするために、厚生労働省の介護サービス事業調査のデータに基づいて検討を進めた。第一に、社会福祉法人と営利法人の離職率を比較する。第二に地方公共団体区分による離職率を比較する。第三に施設定員別、職員数別の離職率を比較する。

4. 結果

運営主体別に介護職員の離職率をみると、社会福祉法人が平均 14.3%、営利法人が平均 26.8%と営利法人の方が 12.5ポイント高かった！！平成 12 年から平成 24 年の年度ごとの離職率をみても、各年とも営利法人の離職率の方が上回っていた(表 1)。

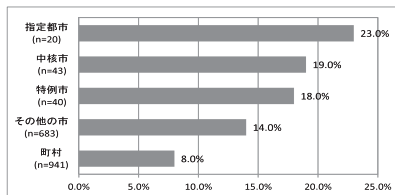
表 1 運営主体別 デイサービスセンター介護職員の離職率

運営主体	平成12年	平成14年	平成16年	平成18年	平成20年	平成22年	平成24年	平均
社会福祉法人	13.0%	10.0%	15.0%	15.0%	18.0%	16.0%	13.0%	14.3%
営利法人	35.0%	35.0%	30.0%	20.0%	18.0%	23.0%	26.8%	26.8%

出所：厚生労働省 平成 12 年度～平成 24 年度介護サービス事業所調査より筆者作成

次に、地方公共団体区分別に平成 24 年度の離職率をみると、指定都市は 23.0%と最も高く、次いで中核市が 19.0%であった。町村が 8.0%と最も低く、指定都市との差は 15.0ポイントであった(図 1)。

図 1 平成 24 年度地方公共団体区分別 デイサービスセンター介護職員の離職率



出所：厚生労働省 平成 24 年度介護サービス事業所調査

(後略)

5. 考察

デイサービスの介護職の離職率と職場環境の関係をみると、運営主体が営利法人の場合、施設の所在地が指定都市の場合、施設規模が小さい場合、離職率が高くなる傾向がみられた。一般に介護職の離職率は高いといわれているが、職場環境により異なることが明らかになった。

佐藤 C 男先生は、訪問介護事業所を対象とした調査の中で、社会福祉法人は営利法人に比べ職員採用および育成システムが整備されているため、職員の職務満足度が高いことを明らかにしている（佐藤 2008）。社会福祉法人の方が離職率は低かったが、人材育成システムの充実度との関係が示唆される・・・。

（中略）

デイサービスの介護職の離職率と職場環境に焦点をあてたが、入所型施設の介護職の就業継続要因の探求にも取り組んでみたいと考える。また、今回は体調が悪くレポート作成にあまり時間がかけられなかったので、次回は頑張りたい。（4989 字）

6. 引用・参考文献

- (1) 介護労働安定センター、2012、「平成 22 年度介護労働実態調査結果」、15-18
- (2) 厚生労働省、2010、「平成 22 年度介護サービス事業所調査結果の概要」、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service12/index.html>（2014 年 7 月 2 日アクセス）。
- (3) 訪問介護の定着促進に向けて—離職の現状と介護職の意識を手がかりに（特集 どうする福祉人材の確保） / 田中 A 子、月刊福祉 90(12)、29-32（2007-11）全国社会福祉協議会
- (4) 介護老人福祉施設におけるケアの質の確保と施設の組織・管理 / 鈴木 B 子、厚生指標 56(13)、1-9（2009-11）厚生統計協会
- (5) 佐藤 C 男、2008、『危機にある介護労働』、労働新聞社
- (6) 阿部 D 男、2014、「介護志す若者に希望を」、『読売新聞』、朝刊、2014 年 1 月 6 日、23 面。
- (7) 介護福祉士あっちやんの日々、<http://ameblo.jp/kaigo-akiko/>（2014 年 7 月 2 日アクセス）
- (8) <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8B%E8%AD%B7%E7%A6%8F%E7%A5%89%E5%A3%AB>（2014 年 7 月 2 日アクセス）

4. 意見交換インタビュー

○谷村 今日は、最初に柴崎先生のクラスの基礎演習について、春学期全体の流れについてお伺いしたいと思っております。そのあとで、先日見学させていただいた第12回の授業について色々とお聴きできればと思います。授業見学の参加者からいくつかご質問を預かっておりますので、その内容も交えながらお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

1) 春学期序盤の授業内容

オリエンテーションなど

○谷村 基礎演習は14回の授業で構成されていますが、今回見学させていただいたグループ発表が組み込まれているのが、第6回から第13回までの「身の回りにある社会問題」というところですね。

まず学期序盤の、第1回のオリエンテーションや第4回の新入生歓迎会についてお伺いします。これらはどういう組織単位で行うのでしょうか。

○柴崎 オリエンテーションはクラスごとですね。歓迎会は学科の行事です。

オリエンテーションは、この科目はどのような科目かという話や自己紹介などで終わりです。みんな仲よくというところで、アイスブレイクや自己紹介から始まっています。

歓迎会は、福祉学科としてのものが5月7日で、あと4月のオリエンテーションの期間に学部としてのウェルカムアワーも別にあります。福祉学科の歓迎会の内容としては、アイスブレイクでゲームもしましたし、先輩の体験談（勉強はもちろん、サークル活動、ボランティア活動、アルバイトなど）を聞く時間もありました。そのあと、クラスに先輩が1人入って1年生の質問を受けてくれました。お互いの親睦と大学に慣れるというところが中心かなと思います。

○谷村 1コマなのでしょうか。

○柴崎 1コマ、プラスお昼休みも使ってお弁当をみんなで食べながら行います。

○谷村 別途柴崎先生のクラスで親睦会みたいなものはありますか。授業見学の際に非常に雰囲気よかったので、そういうこともやっているんですかという質問が見学者からありました。

○柴崎 やっているクラスもあるようですが、私のクラスはあの時点まででは

やっていません。学生は不満だったと思います。「ほかのクラスはそういうことをやっているのに、うちは…」みたいに言っていたので。

私はクラスの親睦を主目的に1コマ使うという方法はとらないのですが、やっぱりいろいろな学生同士が話す機会を持ってほしいと思うので、グループ単位で何かやるときのグループ編成は毎回変えています。見学してもらったグループ発表は興味関心が近い学生で構成したグループでしたが、ほかの回は「じゃあ、今日はくじで決めるよ」とか言ってくじ引きでグループを決めたりして、クラスの全員と1回は同じグループになって話すという機会をつくれればなどは思っています。

書評発表

○谷村 第5回の「書評発表(ビブリオバトル風)」というのは、先生のクラスだけでやられている内容ですか。

○柴崎 そうです。まず図書館を使ってほしいという思いがあるので、第3回で4月30日に図書館が提供している図書館オリエンテーリングというものをやりました。オリエンテーリング出発前に教室で「福祉学科の学生が一番使う本は、番号で言うと369番台だよ」など資料分類の仕組みや図書館ホームページ、OPACの機能、書誌情報の書き方を説明しています。また、ゴール後は、360～369番台の書籍を1冊借りることに、雑誌を手に取り書誌情報をメモするという課題を追加しています。雑誌については、あらかじめ社会福祉に関係する主な雑誌名のリストを渡しました。雑誌記事の書誌情報はリアクションペーパーに記載してもらったのですが、1年生には難しかったようで正確に記載できた学生は少なかったです。

そうして、第5回に「借りてきた本を、グループに分かれてビブリオバトル風に紹介してください」ということをやりました。準備時間はゴールデンウィークを挟んで約2週間でした。本の内容が偏らないようにクラスを5グループに分けました。まずはグループ内で1人3分で発表し、チャンプ本を決めます。チャンプが5人決まったら、今度は5人だけ全員の前で発表させて1位を決めます。そのときは、ちょっとした商品を用意したりしましたが、なかなか盛り上がりませんでした。読んでこない学生もいるかなとか、心配しましたが、全員、発表は出来ていました。

○御手洗 どんな本が紹介されていましたか。

○柴崎 教科書的な本やドキュメンタリー、海外の福祉事情など多種多様です。強いて言えば、児童福祉分野の本が多かったでしょうか。

○御手洗 面白く上手に伝えられていましたか。

○柴崎 はい。結構上手だなと思いました。リアクションペーパーにも「みんな、プレゼン上手だなと思いました」「読みたい本がたくさんありました」といった感想が書かれました。

2)個人→集団→個人で問題意識を深めていく

○谷村 その書評発表の翌週（注：第6回）から、社会問題に関する各自のテーマを追究しつつ、アカデミックスキルを獲得していくという一連の授業が始まります。

○柴崎 まず第6回で社会問題とは何かということについて文献を使った講義とグループワークを通して学びます。そうして、次の第7回までの課題として、各自興味を持った、社会問題に関連する新聞記事を1つもってくるように指示します。

○谷村 社会問題に関するものであれば何でもいいという感じなんですか。

○柴崎 はい。「社会問題とは」という説明はしているので、「社会問題についての記事」というだけの指示です。いろいろな記事をみんな持ってきました。

授業の運営の仕方として、記事タイトルだけ事前に CHORUS でアンケートのところに入力してもらいました。それを見て興味関心が近そうなメンバーになるよう6グループに分けました。また、全員の記事タイトルは一覧表にして配布しています。

授業では、グループごとに、その中で各自持ってきた記事をまず紹介させます。そのあと、今度はグループとして調べていくテーマ1つを話し合っ決めてるように指示しました。どれか1つの記事を選んで深掘りしてもいいし、メンバーの興味関心を確認して何か新しいテーマをつくってもいいよということで。

○谷村 そこで決めたテーマについてグループで発表準備をすすめ、実際に発表するのが第10回と第11回にあたるわけですね。

○柴崎 そうです。そのグループ発表が終わったら、最後は個人作業に戻して、グループ発表を経て生じた個人の関心をもとにレポートを書いて提出してもらい

ます。レポートを書かせるということ、枚数、締切日については、学部共通のルールに基づいています。ただ、どういうテーマで、どういう手順でレポートを書かせるか、という点に関しては各クラスの担当者に完全に任されています。

○**谷村** レポートのテーマを考える時や、自分の問題意識をはっきりさせようという時に、学生一人では煮詰まってしまって思考停止ということがよくあると思います。柴崎先生の授業では、個人の作業や選択が最初にあって、その後、一度グループで取り組むという活動を挟むことで、個々の学生が触発しあい色々な刺激や気づきを得ているんだと思います。最後に個人でレポートを書く段階では、いろんなスキルももちろん向上しているんですが、問題意識や視野が格段に豊かになっているはずですよ。とても勉強になりました。

○**柴崎** どうですかね。やはり1年生はすごく力の差があるので、問題意識がはっきりしている学生は、1人で調べてパワポを作ったほうが楽だと思うんですね。ただ、やはりできない学生もいるので、そこはあえてグループにしているという部分もあります。でも、そうするとやっぱり欲求不満が残る学生がいるので、最後のレポートはまた個人に戻すという形にしています。

○**谷村** このやり方には何かモデルがあったのでしょうか。



○柴崎 教え始めてからの試行錯誤ですね。新聞記事を使うのは、他校でも取り入れていました。ただ、そちらでは人数がもっと少なく、1クラス14、5名ということもあって、毎回2人のレポーターを決めて、記事とレジュメを切ってきて、発表して、議論してというのをやっていたんですね。いろいろな記事が読め、文献講読よりもディスカッションも盛り上がるので楽しかったという声が多かったので、新聞記事は続けたいなとは思ったんです。ただ、立教の基礎演習ではそこにたくさんの時間を割くことはできません。なんとか1回は新聞に触れてもらおうと思って取り入れています。また、いきなりテーマを考えてと言っても難しいので、何か題材があったほうがいいかなというのがあります。

3)グループでのテーマ決定

○御手洗 グループ発表のテーマを決めるにあたって先生は何か誘導を行ったりするのでしょうか。

○柴崎 特定のテーマに向けて誘導するということはしてないですね。ただ、今回は「〇〇の実態と課題」という形にしなさいという指示をしました。何しろまだ基礎知識がないので、何かの実態を整理する、整理をすれば課題は見えてくるだろうという想定で指示を出しています。さらに例えば、『「高齢者虐待の実態と課題」だけだったらまだ広いよね』といって、「高齢者虐待に関する専門職支援の実態と課題」「認知症高齢者に対する虐待の実態と課題」など例示を出しながらテーマの絞り方も説明しました。

それから、「じゃあ、実態を誰かに伝えるためには、どういう項目を調べればいいか、考えてみてください」といって、「まず定義が必要だよね」とか、「対象者は何人いるのか」、「それは増えているのか減っているのか」とか、そういうことを調べて提示すると、実態は伝わっていくという説明をしました。その後で、各グループの調査項目を考えさせました。その調査項目をクラス全員の前で発表してもらって、ほかのグループから「こういうことも調べたらいいのではないかな」というコメントを出させました。これが結構よかったかなと思っています。お互いに「なるほど」と思えるようなやりとりができていました。たとえば、被災地支援のことを調べようとしたグループに対して、「阪神淡路大震災と比較したほうがいいのではないかな」とか、そういう意見がほかのグループから出るんですよ。そのほかにも「人数だけではなくて男女比も知りたいです」とか、「年齢も知り

たいです」とか、ほかにも色々とでてきました。

○御手洗 多くのコメントを誘発するコツというのがあるんでしょうか。

○柴崎 今年結構、強制的に指してしまっているんです。授業見学の日も、「では、今日はリーダーさんの向かい側の人からね」という形で指名していました。いつもあんな感じで、あらかじめジャンケンとかして番号を決めさせておいて、「4番の人、コメントをください」とか言うと、もう言うしかありません。そこは強制的にしています。

○御手洗 平等にみんな当たるような感じですね。

○柴崎 そうです。

4)板書によるファシリテーション

○御手洗 その発表とコメントは、口頭でのやり取りだけですか。

○柴崎 口頭での発表やコメントを板書しているだけです。各グループのテーマと、全部書き切れないですけども、発表された調査項目のめばしいものを書いて、それに対してほかのグループから意見が出たら、それも書いて。私からも、これは調べてほしいというものがあれば書き加えました。どんどん板書して、「汚くてごめんね」という思いもあったんですが、最後はみんなスマホなどで撮って帰っていきました。

○谷村 自分の手元では写さないんですね。

○柴崎 写さないんだか、写せないんだか分かりませんが。

○御手洗 グループの初顔合わせから、新聞記事の紹介、テーマ決めのディスカッション、グループ発表、フィードバックまで、1コマでおさめるのは大変ではないですか。

○柴崎 ものすごく大変でした。最後はすごく慌ただしくなってしまって、実はコメントを付ける時間が短くなったりもしたんです。最後すごくバタバタしたので、次の回の導入のところで、グループテーマの確認ということで、前回こういうテーマが挙がっていて、他のグループからのコメントはこういうものがありましたね、私はこういうコメントをしていましたよというのを、確認しました。でも、印刷して渡すと、みんなそれに引っ張られるので、もう画面でしか見せませんでした。ササッと。

○御手洗 私もそのあんばいが難しいと思うことがよくあります。あまりにもこ

ちからを与えずに、意見を言い過ぎたりすると、それに引っ張られ過ぎてしまっていて、グループの個性が出にくいようです。授業を見学させて頂いたなかで、すごくグループごとに個性が出ていた気がしたので、どうやってテーマを決めたんだろうかと気になっていました。

5) コンピュータ演習

○柴崎 各グループのテーマについて大まかな見通しがついたところで、「次回コンピュータ室での授業までに、検索したいキーワードを考えておくように」と指示しました。これが学生たちには難しいみたいです。漠然としてしまっていて。

○谷村 コンピュータ室での授業というのは第8回、第9回の「データの探し方・読み方・見せ方」ですね。配布資料を拝見すると、タイトルの通り、各種データベースでの情報検索のイロハから、Word、Excel、Power Pointなどのソフトの使用法まで丁寧にご指導なさっています。回数もコンピュータ室で2回と科目全体の中での比重も小さくはないです。

○柴崎 そうですね。4年間の学習の起点となるスキルなので、特に重視しています。ただ試行錯誤は続いていて、毎年やるのが変わっています。来年もこれでいいかということは、これから考えないといけません。

○御手洗 先ほど、学生がなかなか検索ワードを見つけられないというお話がありました。

○柴崎 そうなんですよ。授業でジャパンナレッジプラスとか、そういうものを紹介して、「キーワードを入れて検索してください」と指示を出すと、その前の週にキーワードは洗い出させているはずなのに、後ろから覗いてみると「しょうがい者」といったかなり漠然とした大きな言葉を入れているんですよ。

○御手洗 特定の言葉にとらわれてしまったまま、広がっていかないし絞り込めていけないんですね。

○柴崎 そうなんです。ただ、リアクションペーパーに「自分はGoogleとかで検索をいつもやっているから、検索は得意だと思っていた。でも、ジャパンナレッジプラスでも、CiNii（サイニー）でも、検索がすごく難しかった。検索ワードをうまく入れる大変さが分かりました」と書いている学生がいて、それを見たときは、ちょっとやったかいたが合ったなと思いました。本当は十分に検索できるところまでいければいいんですけども、難しいということをつかってくれたか

ら、まずはいいかなと。

○御手洗 四六時中検索していてデジタルネイティブと言われたりするわりに、そういう検索に必要な能力は新たに学習する必要があるのですね。確かに、「本を探してきてください」と言うと、学生たちがみんな「ありませんでした」と言ってくるのですね。ないわけがないんですけども。

○柴崎 そう、ないわけはないんです。特に1年生が思いつくテーマの本がないわけがないですよ。でも Google でヒットしないと、「ない」と言いますよね。適切なデータベースを使って、すぐにあきらめないで、検索ワードを変えながら探し続けるということがみんなできないですね。ですから、「情報を集めるのは根気が要りそうです」と書いてくれるようになっただけでも前進だと思っています。

6)見学当日の授業に関連して

レジュメの提出期限と準備

○谷村 見学者からのご質問で、「発表グループへのコメントの準備が相当大変なのではないでしょうか」というものがありました。グループ発表のレジュメですが、提出期限はいつなのでしょう。

○柴崎 授業の前日の17時です。

○谷村 そこからコメントの準備にどれぐらいの時間をかけておられますか。

○柴崎 そんなにかけていないですね。17時までにもらって、コピーして。要は、それ以前の回で指導した部分ができているかどうかを重視して、コメントを返していますね。問いを立てて、その後の流れが適切にできているかという点が中心です。

17時と言っているけども、結構早く出してくるグループもあるんですよ。2日前とかに出してきたりもするので、そこは先に見ておきました。期限までに出せなかったグループが1つありましたが、それはもう当日その場でコメントをしています。

コメントではまず褒める

○谷村 コメントするときに気を使っていることはありますか。

○柴崎 基本、褒めるようにしています。どこか褒められるところはないか、できるだけ探します。見学当日の発表グループで、必ずしもうまくいっていないと

ころがありました。でも、何か褒めようとは考えていました。必ずよくできていますと。

○**谷村** そのグループでは「発表タイトルと問いと本論がそれぞれ対応していない」という分かりやすいご指導があり、学生たちも納得したのではないかと思います。一方で、発表の分量やしゅべり方、アイコンタクト、スライドと口頭説明のバランスなどはとてもよかったですと思います。

○**柴崎** それは、前の週が生かされています。前の週に3グループの発表を終えています。比較すると2週目はみんな上達しています。

○**谷村** 学んだのですね。

○**柴崎** 前の週は、まず時間オーバーが2グループ出たんですね。その分、確かに内容は豊かだったんですけども、完全に時間オーバーしているよねと。やはりそこはバランスが必要だということを言いました。時間オーバーしたということは、リハーサルをしなかったでしょうと。みんなの前で言っていますから、そこは2週目のグループはみんな気を付けてきて、時間はほぼ守れていました。

学生同士のコメント

○**柴崎** 発表を聴く側の学生は、こういうものを書きながら聞いています (p.93 参照)。やはり「2回目だったのでみんなクオリティが上がっていました」という感想が多かったですね。全部、記名式で書かせて、皆さんに見学していただいた次の週に各グループにこれを渡して、反省会をさせています。よかった点と、今後改善したい点を、みんなの前で発表させました。

○**谷村** 記名式にしているのは、先生がチェックするためですか。

○**柴崎** そうではありません。やはり、人にコメントするときには責任を持ってコメントしなさいという意味です。無記名で適当に「よかったです」と書かれても、あまり意味がないですから。

○**谷村** 授業中には、口頭でのコメントもさせていました。グループ発表1件ごとに、聴いている各グループから1人ずつという形式でした。その時のコメントが、質問は1件だけで、あとはすべて褒めるコメントでした。これにも何らかのルールがあったのでしょうか。

○**柴崎** そうではないです。おそらく、遠慮しているんだと思います。やはり、自分が言われたくないと思うことは、人にもいいにくい。だからいいところを見

つけて言っているんだと思いますね。記入シートも、よかった点から書くようになっていきますし。

○谷村 では、学生のコメントは、手元で書きながら、順番が回ってきたら声に出してコメントする、という形だったんですね。

○柴崎 そうです。あらかじめ発表グループの数だけ「フィードバック・シート」を配っています。

6月25日

フィードバック・シート

発表テーマ: 認知症高齢者・家庭介護の実態と課題

評価者:

1. 一番良かった点(納得できた点)
認知症や介護について、噛み砕いて話してくれたこと
理解が深まりました。
2. あまり納得できなかった点
3. プレゼンテーションの方法で見習いたいと思った点
、だらだらと文字を書かずに、簡潔にまとめている点。
、グラフの数字が大きくて見やすい点。
4. プレゼンテーションにおいて改善した方がよいと思った点
文字が少し小さかったような気がします。
5. その他

学生が実際に記入したフィードバックシート

レポート執筆の指導

○谷村 授業後半ではレポート執筆に関する指導が行われました。大きく分けて2つの内容でした。1つ目はテーマや仮説をどういうプロセスで考え設定していくかという内容で、2つ目はレポートの書式やルールに関するものでした。2つ目の方は、間違いさがしという形で準備されていてとても興味深かったです。

○柴崎 前者については、時間が十分にあれば、資料の空欄をその場で埋めさせて発表してもらおうというのをやろうと思ったんですけども、かなり押し寄せだったので、作業自体は宿題にしてCHORUSに上げさせました。今、学生1人1人に、返事を書いて返しています。やっぱりテーマから問いや仮説へとつながられないですね。すごく添削に時間がかかっている、もうなかな私が作り直しているという感じですね。

ですから指導した手順に乗っかって書いていく学生と、そうでない学生と両方出てくると思います。でも、学生も多様ですから仕方がない面もあります。必修科目ですから、とにかく最後はレポートは必ず出してくださいと言っています。来年も基礎演習を持つのであれば、やっぱり授業の中でもうちょっとワークの時間をつくって発表してもらって、ということをやったほうがいいと思いました。そうしないとなかなか書けないなと。14回の授業では大変厳しいのですが、

○谷村 間違いさがしを使った指導は以前からやられているんですか。

○柴崎 これは初めてやりました。注意しても全然直らないという状態だったので、間違いさがしでもすれば切り替えもできるし集中力も上がるのではないかと思います。これはじっくり答え合わせをしました。

○御手洗 意外と見つけられないところもあって楽しかったです。学生も楽しんでグループで話しながらとても積極的に取り組んでいました。

○柴崎 でも、私が「段落の書き出しでは字下げをする」という答えを言ったときの学生のどよめきが、ちょっとショックでした。そこ気づかなかったんだ、と思って。字下げだけでもしてくれたら御の字です。

レポートの評価について

○谷村 レポートについて、特に形式のことを丁寧にやられていたんですけども、形式面と内容面とで、配点はどのような形でお考えですか。

○柴崎 レポートは基礎演習全体の30点分なんですけれども、形式面10点と

内容面 20 点で見ようかなと思っています。形式はあれだけうるさく言っているので重視したいと思っています。ただ、形式ができている学生は、内容もいいんです。ですから、どう配分しても、形式面で不十分な学生はやっぱり内容面でもそうで、合わせても評価が低くなりがちです。

○**谷村** 形式の重視は、まずはそこから教えるという初年次演習の位置づけを反映してということでしょうか。

○**柴崎** そうですね。

○**御手洗** 入学直後にこれだけ丁寧に教えてもらう機会があれば、後に続くほかの授業の先生方も心強いのではないかと思います。実際に、授業見学に参加された先生方からそういうコメントを頂いています。

7)初年次演習のめあて

アカデミック・スキルに関して

○**御手洗** 柴崎先生が、初年次演習を担当されるようになったのは立教にいらしてからでしょうか。

○**柴崎** 立教は 2 年目ですが、その前に他大学の非常勤講師で 5 年ぐらやっています。それと他大学では、立教の全カリのような位置づけのコンピュータ演習の授業助手を 3 年ほどやっていたんです。今やっているコンピュータ演習には、その時の経験が活かしています。

○**御手洗** そういところにご経験が活かされているのですね。

○**柴崎** ただ、やはり大学がかわって、立教のやり方もあるし、学生の雰囲気もあるので、まだまだ試行錯誤の段階です。立教の基礎演習は、「大学生活を円滑にスタートするために、大学を知り、友達をつくり帰属意識を高める」という科目のねらいが強調されているように感じました。前の大学では、文献講読を中心に、レジュメを切る、議論する、レポートを書くというところを中心に指導していましたが、現在の基礎演習にはそこまでは入れられていません。ですから今後どうしていくかは課題です。

でも立教の学生は恵まれていると思います。図書館の『レポート作成ガイド』もある、大学教育開発・支援センターの『Master of Writing』もある。これを 4 月に配るということは、やっぱり学部として、1 年生でここまでできてほしいということだと思います。私自身も、この春学期に大学生として必要なことを身

につけてもらわないと、後が大変だなという思いがすごくあります。でも、実際完璧にはいかないから、こういう冊子をずっと持っていて、上級生になっても困ったときはあれを開こうという意識をつけてくればと考えています。

問題意識に関して

○御手洗 アカデミック・スキル以外の点で、柴崎先生が1年生の演習で伝えておきたいということはあるですか。抽象的な質問なんですけど。

○柴崎 スキルじゃないものといわれると、何か問題意識を持ってほしい、という点でしょうか。言われたことを覚えるだけではなくて、1年生はすごく単純なんですよね。言われると何でもそうだと思ってしまったり、テレビを見れば、それにずっと気持ちが寄せられてしまったり。そうではなくて、やはり自分で関心を見つけてほしいと思っているし、うのみにしないで自分で問いを立てられるようになってほしいと思っています。

同じ福祉学科でも、いろいろな学生がいますよね。第一希望ではなかった学生もいるし、親に言われたからここに来たという学生もいます。それでも全員が1年生のうちに、何か1つ自分はこれを勉強したいというテーマを見つけてほしい。貧困問題でもいいし、子育て支援でも何でもいいんですけども。福祉学科は2年生の春学期には、社会福祉士・精神保健福祉士の受験資格を取るかどうかを選択しなければいけないんですね。資格を取らないほうに行ってもいいんですけども、取る学生は、今度はどういう領域で実習をするかを考えないといけません。貧困問題を扱う福祉事務所に行くとか、高齢者問題に関心があるから高齢者の施設に行きたいとか、そこを決めなければいけないんですね。だから、あまりぐずぐずしていると、2年生になって「どうしましょう。もう決められません」という状況になってしまいます。そうならないように、やはり1年生のうちに何か見つけてほしいと思っています。

○谷村 そういう学部・学科の特性を反映して、基礎演習の目標に4年間の展望を持たせるという点が含まれているのですね。

○柴崎 そうです。でも、ちょっとそこまでできていないですね。何か手前の形式ばかりで終わってしまったかなという反省もあります。自分でもジレンマですね。こんなうるさいことばかり言わないで、もっと4年間の展望を持たせたりとか、福祉学科の学びの面白さみたいなことを伝えたりといったことをやるべきか

なとも思っています。

8)初年次学生の得意・不得意

○**谷村** 立教と他の大学とで、継続的に初年次演習を教えてこられて、その難しさというのはどの辺にあるとお感じですか。また、現在の基礎演習の授業の流れは、実践を重ねながら作り上げてこられたと伺いました。最初は相当苦労なさったのではないのでしょうか。

○**柴崎** 苦労しましたね。どこまで1年生に期待していいかが全然分かりませんでした。他大学では文献講読が主で、どういうレベルの文献がいいのか、もう文献選びから迷いましたね。教えてみると、意外にできると思ったこともあるし、その逆もありました。

○**御手洗** これはできるんだなというのはどういったことなのでしょう。

○**柴崎** 授業を見て頂いて Power Point で作ったスライドを褒めていただきましたが、Power Point は今の学生はできます。ほとんど教えなくても、高校で習ったという学生もいるし、要は Word が使えればある程度できるので、「そんなに凝らなくてもいいですよ。そこではなくて別のことに時間をかけてください」と言っても、凝ったものを作ってきます。中身はさて置きですけどもね。アニメーションなども、私はササッと2、3分ぐらいしか教えていないのに、あんなに付けてきます。

○**御手洗** すごくかわいいものをみんな作ってきて。

○**柴崎** そこは重要ではないんですけどもね。

○**谷村** 思った以上にできなかったというのはどの辺だったのでしょうか。

○**柴崎** ディスカッションができなかったですね。これが悩みの種で最初から今までずっと続いています。他大学では基礎演習が1年次の秋学期だったので、春学期に社会福祉学概論(必修4単位)を履修し、ある程度の基礎知識をすでに獲得したうえでの基礎演習でした。なので、ディスカッションももう少しできるかなと思ったんですけども、できなかったですね。私もどう介入していいかも分からなかったし、そこが一番の悩みどころだったと思います。

○**谷村** できると思ったのにできないディスカッションをさせるために、何か方策はあるのでしょうか。

○**柴崎** それにはまだ成功してないですね。今回の基礎演習の中では、文献をも

とにディスカッションをするという機会は1回だけでした。第6回に、社会問題に関する文献を読んでグループごとのディスカッションをしています。今回やったディスカッションは、私がテーマまで言っているので、そのテーマをもとに考えるということではできました。

問題は、「何班さんは文献の何章ね」と割り当てて担当させる場合に、要約の発表までではできるのですが、そこからディスカッションのテーマを自分たちで設定して、クラス全体で話し合うということができないことですね。その章に対する反論を挙げてとか、疑問点を挙げてとかいうと、そこはできなくて、すごく大きなテーマを投げかけ、発表者以外はポカンとしてしまうんですね。

○谷村 昨年のFDワークショップをはじめ様々な場面で、やっぱり先生方は同じことをおっしゃるんですね。要約のところまではできる、あるいは引き上げられる。けれども、その先が初年次生の壁で、どうすればよいのか、1年生はここまでよしとするのか、と。

○柴崎 そうなんですね。だから、そこまで求めずに要約だけしてもらって、こちらから何かしらテーマを持っていったほうがいいのかという気はしていて、いいテーマが出なかったとき用の、隠しテーマを用意するようにしていました。

どうしても学生に任せるとざっくりしてしまうんです。あと二者択一のような安易な問いを立てる場合もあります。例えば、しょうがい者の雇用に関する章を要約してきて、議論のテーマは「しょうがい者と健常者はどちらが就職しやすいか」と、そうになってしまうんですね。そういう場合は、もうこっちが相当介入していろいろな振りを出していきます。福祉学科で学ぶ上で、「いろいろなもの見方があるよね」ということを実感してもらうために、わざと議論をかき回したりします。

○谷村・御手洗 予定の時間を超えてしまい恐縮です。本日は様々なお話を伺うことができました。長時間本当に有難うございました。

参加者の声

寺崎 昌男 (大学教育開発・支援センター顧問、立教学院調査役)

深みがあって和やかな協奏曲―柴崎先生の基礎演習―

最初に感想を書かせていただきたい。久しぶりに見た充実した授業であった。特に先生の側からの発言や情報発信が適切で、口調も、穏やかかつリズムカルであった。大学での学習を開始しようとしている初年次生たちへの授業としては、大変成功したものだったと思う。

成功のキイは何だったか。

1 時間半の授業の流れのどこかに絞って答えるのは難しい。「子育て支援」「低所得者援助」「医療ソーシャル・ワーカー問題」という三つの問題を選んできたのは、学生たち自身であった。そしてその調査研究の内容や方法、論理的構成について先生が評価や感想を述べられた。すなわち、この授業で大事なものは学生たちの発表テーマの選択の善し悪しや報告発表の巧拙ではなかった。

第一に、調査研究の論理構成や問題意識の組み立て方が適切であるかどうか、報告のトピックの移動が妥当に行われているか、飛躍していないか、といった基本的な筋道に関する先生側からのコメントが、焦点の一つだった。そして第二に、自分の名前をはっきり書くかどうか、論文未完成の言い訳を書くのはエチケットなのかどうか、典拠をどのように記すか、といった提出レポートの要件ないしエチケットに関する事柄についても、先生側のコメントが示された。先生のそのコメントの出し方、リズム等が授業の成否を決める、というつくりになっていた。

第一のポイントについて先生の指摘は実に鋭いものであった。第一グループにおいて、「子育て支援」というテーマがいつの間にかシングルマザー論になって行った経緯について、その遠因は最初の3重の問題意識の相互矛盾にあるのではないかというポイントなど、中・高校時代を通じて研究・報告をしたことのない学生たちにとって、極めて新鮮な指摘だったのではあるまいか。

第二のポイントについては、先生の落ち着いた、決して鋭利過ぎない、しかし“ネーミング”“字数”“アンダーライン” などなど極めて具体的なポイントを押

さえた注意事項の提示は、学生たちがよく理解したことと思われる。

コミュニティ福祉学部の基礎演習なのだから当然かもしれないが、学生たちの選び取ったテーマは、3つとも、いかにも福祉問題を専攻する学生たちらしいものであった。しかし彼らの所属学部が何であれ、先生の応答の中から学生たちの前に示されたのは、「学問」「研究」（しかも大学やクラスという公の場での発表や報告を伴うそれら）の基本手法群である。それらを知ると知らないとは今後4年間の学習が危うくなるほどの基礎知識である。

「今後のあなた方の勉強にかかわってきますよ」と2度ほど念を押された柴崎先生の言葉と熱意は、教室に十分に行き届いていたと思う。

おわりに

今回、2014年6月3日に開催された飯島寛之先生の経済学部「基礎ゼミナール」に関するワークショップと、7月2日に開催された柴崎祐美先生のコミュニティ福祉学部「基礎演習」の授業見学会に参加させていただいた。

私も本年度、法学部で初年次生向けの「基礎文献講読」を担当しており、大学に入りたての学生を相手に何を伝えるべきか、どのように運営すべきか、試行錯誤を繰り返していた。14回ある春学期の授業で、1年生に「読む・書く・聞く・話す」それぞれについて、大学生として必要なスキルを伝えるというのが、どの学部でも初年次生向けの少人数制クラスの担当者に課された課題であろう。

やったことのある方をご存知かと思うが、これはかなり辛い。1年生は、大学受験を終えたばかりである。彼ら・彼女らは、自由を手にしたばかりである。その自由を余すことなく行使したいピークの時期が、大学1年生の4月である。私も学生時代そうであったが、多くの1年生たちにとって、授業の内容よりも友達づきあいや恋愛、あるいは趣味やスポーツの方がはるかに大事な年頃なのである。また、クラスの割り当ても、私の所属する法学部のように、自動割り当ての場合も少なくないものと思われる。法学部の2年次生以上のゼミでは、学生自らが登録を希望して受講するので、一定のモチベーションがあってクラスにやってくる。しかし、基礎文献講読の場合、そうとは限らない。2年次生以上のゼミとはかなり異なる、バラエティー溢れる面々と対峙しなければならない。このような教員たちにとって圧倒的に不利な状況の中、必要なスキルという、決して面白くはない、得てして面倒なことを伝えなければならない。さらに、「読む・書く・聞く・話す」それぞれにつき、伝えるべきことは膨大にある。大学教員にとって、初年次生向けのゼミほど大変なものはないのではなかろうか。

そんな困難な状況に敢然と立ち向かう飯島先生や柴崎先生が、私には、カエサルやジャンヌ・ダルクのように映った。本冊子で紹介されているように、飯島ゼミの学生は、全員が少なくとも1回は発言している。柴崎ゼミの学生は、周到な準備の下に、パワーポイントを使って見事な報告をしている。これは決して当たり前のことではなく、飯島先生、柴崎先生の周到な準備と計算があって初めてなしうるものであることが、初年次生ゼミの担当を経験した者であればよく分か

と思う。両先生ともに、事前にさまざまな準備を行い、多くの工夫を凝らしておられた。そこには、どのようなルールで討論を行うかという仕組みを作るレベルでの工夫もあれば、どのように学生と接するかという現場レベルでの工夫もあった。本冊子には、さまざまな有益なヒントが散りばめられている。討論の中には、他の先生の経験談などもいろいろと紹介されている。

答えは1つではない。しかし、確かなことが1つある。それは、教員の創意工夫が必要になっているということである。飯島先生は、報告班と対立班のレジュメのサンプルをご自身で事前に作成し、これからやるべきことのイメージを学生に与えている。柴崎先生は、レポートの書き方を単に抽象的なルールとして紹介するのではなく、さまざまな間違いを散りばめた先生自作のレポートを学生に読ませ、間違い探しをさせることにより、大事なルールを主体的に体得させている。

先ほど、初年次教育を任された教員の状況を「圧倒的に不利な状況」と評した。今回の企画に参加する前は、私にとって初年次教育にはそのようなイメージばかりがつきまとっていた。しかし、飯島先生、柴崎先生は、そんな私に初年次教育には別の側面があることを教えてくださった。1年生たちはそれぞれ大きな可能性を秘めている。1年生自身も、希望を胸に大学に入学している。われわれ教員は、そんな彼ら・彼女らを学問の世界への旅立ちに誘う役割を有している。1年生たちが、自発的にその旅路へと歩みを進めるためには、それを支え、鼓舞する存在がどうしても必要になってくる。そんな役割を見事に果たしている両先生の奮闘ぶりを拝見して、私も頑張らなければと思った。

最後に、授業の準備だけでも大変であるにもかかわらず、今回の企画に多くの時間をかけてご協力くださった飯島寛之先生、柴崎祐美先生に改めて心よりお礼を申し上げるとともに、ワークショップ、授業見学会にご参加いただき、本冊子の内容をより充実したものにくださった皆様、さらには飯島ゼミ、柴崎ゼミのゼミ生の皆さんにも改めて感謝申し上げたい。

大学教育開発・支援センター センター員、法学部教授

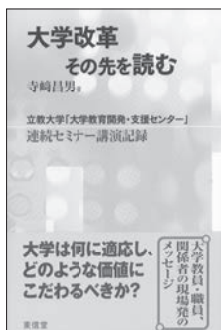
幡野 弘樹

●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

- NO.1** 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)

- NO.15** 学位取得へ導く大学院教育のあり方
—博士後期課程を中心として— (2012年)
- NO.16** 日本の大学に求められている国際通用力とは (2012年)
- NO.17** 学びが高まる学習環境とは
—ハード、ソフト、コミュニティー— (2013年)
- NO.18** 大学院研究指導への誘い^{いざな}
—海外マニュアルの紹介— (2013年)
- NO.19** 「読む」学生が育つ大学教育を求めて
—若者の読書実態と授業実践を始点として— (2013年)
- NO.20** アクティブな学びをデザインする vol.3
—2学部における初年次演習科目の実践から— (2014年)

●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』(2007年)
東信堂 ¥1,300

授業担当者

飯島寛之（経済学部会計ファイナンス学科准教授）
経済学部「基礎ゼミナール1」（本書第1部・第2部）
柴崎祐美（コミュニティ福祉学部福祉学科助教）
コミュニティ福祉学部「基礎演習」（本書第3部）

2014年度FDワーキンググループ

小澤康裕（ワーキンググループ座長、副センター長、経済学部准教授）
家城和夫（センター員、理学部長）
幡野弘樹（センター員、法学部教授）
谷村英洋（センター学術調査員）
御手洗明佳（センター学術調査員）
寺崎昌男（センター顧問、立教学院調査役）
今田晶子（センター課長）
上原裕輔（センター職員）
佐藤百恵（センター職員）

大学教育開発研究シリーズ NO.21

アクティブな学びをデザインする vol.4

—学びの転換を促す「導入期」演習科目—

2014年10月発行

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615
<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>
e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

制 作

株式会社アクセスリード
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階
TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY